
光と闇

ミーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇

【Nコード】

N6895X

【作者名】

ミーさん

【あらすじ】

あの闘いから17ヶ月過ぎた。死神の力は皆のお陰で取り戻し家族や友人達を失わずに済んだ。だが…

虚（前書き）

初です。

グダグダですが、宜しく願います。

虚

月の光を浴びながら屋根を駆け抜ける一人の青年がいた。上下黒い着物に身を包み、背中に見えるのは大きなサラシの用な物に巻かれた大刀…一番目立つのが風に靡くオレンジ色の髪。

駆け抜ける先には仮面をつけた虚と呼ばれる化け物が一匹。

「地域担当は何やってんだ」

青年は、そんな化物に追い付き背中にある無骨な大刀を手に取り布が巻いてあつた晒しがサラサラと解かれる…と同時に虚目掛け一気に降り下ろす。

「グオオオオオー」

虚は断末魔の叫びとともに塵の用に消えていく。

「ふう…イツチヨあがり」

月の光に照された人物こそ死神・黒崎一護であり将来隊長と噂されている人物である。

目次（前書き）

続きです。

日常

「ゲツモーニーンー護！！」

と、ドアから勢い良く飛び蹴りを繰り出して来たのは一護の父・黒崎一心である。普段お茶ら毛て見えるが家族の事を第一に考える（娘達限定？）良き父親でありそして死神でもある。一護は、その飛び蹴りを交わすと手を顔面に充て床に叩き落とす。

「朝っぱらから毎度毎度何考えてやがる！！このクソ親父！！」

「何を言う！父さんのスペシャルファイティングドロップキック（長い！）を何故避ける？！」

「うるせー朝っぱらから近所迷惑何だよ！！少しは大人しくしやがれ！！このクソ親父！！」

ボキバキボキ！

「ギャー！！！！」

と、言う悲鳴が朝から木霊した。

「お兄ちゃん！ご飯出来たよ〜！」

と、下から遊子の声

「おう、今行く！」

「あれ？お父さんは？」

「上で伸びてるんでしょどうせ直ぐ復活するって掘ったときな遊子」

「ふうーん。そ」

何とも素っ気ない娘達である。だが、娘達の聴こえたのか？

「遊子夏梨どうして父さんにそんなに冷たいんだ〜！？父さん悲しい！」

「ほら復活した」

「母さん娘達が思春期なのか娘達が構ってくれないよ〜」

と、言いながら真咲遺影特大ポスターに向かって泣き真似をする一心。

其をよそに、

「さ、ご飯食べよ。」

「」「頂きます。」「」

「……！母さ〜ん！娘達が冷たいよ〜」

「一生やってる！！このバカ親父！！！！」

「ね〜！速くご飯食べちゃってよ！片付かないでしょ！」

「・・・はい・・・。」

食事を終え

「行ってきます。」

「そんじゃ、俺も行ってくるぜ」

遊子も夏梨も霊力が有り遊子はウツスラしか見えてなかった霊ははつきり見える用になり、また夏梨は霊的濃度が更に磨きがかかった。空座町は、そんな霊的濃度の高い人が多いため死神が重点的に見廻りをしてきている。

睡魔（前書き）

携帯だとちょっと厳しいね。

睡魔

「夏梨ちゃん…起きて…ねえ、起きてっば…」

遊子が揺り起こす。

「うう…誰？」

寝惚けていた為かいきなり遊子の腕をおもいつきり掴んだ！

「痛いよ！夏梨ちゃん！」

少しの間ぼんやりしていたが、臆て覚醒し…

「あれ？」

「もうお昼だよ！夏梨ちゃん。翠子ちゃんと一緒に食べよ！早くしないと時間が無くなっちゃうよ！」

「うん、分かった」

そう言いながら翠子と三人で食べ始めた。

ふと遊子と夏梨は何げなく窓の外を見た。

「ねえ？二人してどうしたの？」

翠子は二人が同じ方向を向いて惚けーとしていたので聞いた。

「「え？」」

「だつてさあ〜二人して窓の外なんか見ちゃって…何か見えるの？」

「……まさか！…また幽霊！？」

「「…うん」」

「やっぱりね。だと思った。最近、二人して同じ方向見たり、それに双子だからかな？夏梨は、前から幽霊さんはつきり見えてるのは分かってるけど…遊子ってそれほどでも無かったでしょ！」

「あと、授業中先生には分からない用に居眠りしてるよね。先生の目は誤魔化しても私の目は誤魔化せないよ！二人ともホント〜に大丈夫？」

普段、遊子も夏梨も授業中滅たに寝ることはない。だが、此处最近眠くて眠くてしょうが無いのだ。

「「……………」」

二人して何も言えずに、遊子と夏梨は、顔を見合せた。

その頃、虚を発見した。

エリート死神？アフロさん？いやいや多分芋山さんだ！！

「えーい！このエリート死神！車谷源之助を嘗めるなー！！」

「それと名前を間違えるんじゃないぞ！チキシヨーー！」

と、虚を倒していた。

存存（前書き）

最近？コソの姿が見えないような？

存存

「ねえ夏梨ちゃん…私たち最近変だよな。授業中に居眠りしちゃったり朝早く起きれなかつたり…って聞いている？夏梨ちゃん！」

「?…うん。」

夏梨と遊子は、下校途中歩きながら話していた。だけど何処か夏梨は上の空…

「此の儘続いたら授業に付いていけなくなっちゃおうよ！」

遊子と夏梨は困っていた。それは、本当に遊子が言った事は、間違いでは無いし、自分も勉強に付いていけなくなるのは嫌だ。それに夢の事も気になる。

まあ、夢と言っても全て覚えて居る訳でわない。

二人は、何故かは分からないが最後は誰かの手が目の前に差し出され、その手を掴もうとした所で目が覚めるのである。

「「ただいまー」」

「おう、おかえり。」

今日は、カレーだからね。

と、言いながら着替えをしに二階に…

廳で着替えを済ませた遊子は、エプロンを掛ながら台所へ

夏梨も着替えを済ませリビングに行くとしたが、隣から物音がした。

「あれ？一兄帰って来たかな？」

夏梨は、15と書かれてあるプレートの前まで行き、

「一兄居るの？…開けるよ。」

と、言つて部屋に入った。

「一兄？」

夏梨は、辺りを見渡した…部屋の片隅で必死に人形の振りをしていたが…夏梨の目がコンの人形を捕えた。夏梨は、笑みを浮かべ…

「遊子…！」

と、言いながらコンを驚掴みに…

「ギャー…！！！！お助け…！！！！」

夏梨は、満面の笑みを浮かべリビングへ

「夏梨ちゃん、お父さん、…あれ？まだ、お兄ちゃんまだ帰って来てないよね？」

「遊子！はい、これ！」

夏梨は、驚掴みにしたコンを遊子の前に差し出した。

「キヤー！ポストフー！」

遊子は、コンをギューと思いつき抱きしめた。

「（グオ！イジゴ！…ハ、ハヤクカエツギヤー）」

夏梨は、満面の笑みをしながら…

「あー！お腹すいた。」

と、言いながら遊子が装ってくれたカレーをテーブルの上に並べた。

その後で見ていた一心は、ニヤニヤしながら笑いを堪えていた。

「（この際、誰でも良い！だずげでー）」

コンの心の声が響く事は無かった…

心的（前書き）

遊子と夏梨はつかし。そろそろ…。

心的

遊子は、夢の中にいた。自分は何処に居るのか？

廻りを見渡せば、水晶のような大きな柱が幾つも連なっている。

目の前には、人らしき人物が…それと…後ろにもう一人？

その目の前の人物らしき人を見れば、自分の母親に似ているくらい暖かくそして優しい雰囲気的人物。すると目の前に、フワリと降り立つ。

聴て…その人物は、手を差し出し。その手を握ろうと…

『……………』

「うう…お母…さん？」

「？遊子…」

夏梨は遊子が普通の夢を見ていたのだと思ったが…もしかしたらと思ひ、

「遊子！もしかして普通の夢を見ていたんだよね…？内容覚えてたりしてる？」

「ううん違う…て言うか…今日は全部覚えてるよ。」

「どんな？」

「うん。えつとね。廻りが水晶で囲まれててね、目の前にね、不思議な人が居てね、それとね…暖かくてそれから…いつもと同じだね。」

「

「ふううん。わかった。」

「あ！いつけない！！朝御飯！！」

「もう、お昼過ぎだよ。」

「あれ？」

遊子は、時計を見て午後3時を過ぎている事に驚き、

「ごめんね、御飯造らなくちゃいけないのに…。」

「大丈夫だよ。私もつい30分位前まで寝てたからさ。あと、遊子が起きないから親父がもう少し寝かせてあげなさいって要ってたから。」

「…でも、私、夢は見てたけど全然覚えてなかったな…。」

「あ！そうだお兄ちゃん帰ってかた？」

夏梨は、首を横に降った。

「わからない。」

「来たら夢の事相談しようよ。」

「たね。」

二人は、二階から降りた。

「おう。遊子、夏梨起きたか。それと、学校には連絡したから安心しろ。」

「うん。わかった。」

遊子は、父親に兄が帰って来たのかを聞いた。

「お兄ちゃん帰って来た？」

「!?!」

一心は、顔には出さないが暫くの間、誤魔化さなければならなかった。

「いや、帰ってきてないぞ!暫く帰って来ないとよ。」

「えー!私と夏梨ちゃんお兄ちゃんに相談したい事があったのに!」

「なに!一護に相談だと!父ちゃんじゃ駄目なのか?」

と、大きなリアクションを取る一心に対し、

「えーだって、お父さんに相談何かしたくないもん。」

一瞬一心は、固まり…真紀特大ポスターに行向かって、

「ああー!母さん!やっぱり思春期なのか娘達が相談もしてくれないよー!」

「当たり前だよ。何で親父に相談しなくちゃいけないんだよ！」

「心は更に泣いた？」

託す

尸魂界では、緊急隊首会が開かれていた。

それは、黒崎一護が現世から消えてしまった事について論議していた為である。

黒崎一護は、いわば護挺十三隊に取って命の恩人であり、藍染惣々助を打ち破った功労者である。

そして、現世と尸魂界を救った人物。その、黒崎一護が理由もなく失踪するのは可笑しい。

「黒崎くんは、まだ見つからないのか。」

浮竹は残念そうに言葉を発した。

「今、刑軍を率いて現世、虚園に、全力で隈無く探している所だ。」

「技術開発局も引き続き探してはいるが、一向にセンサーに引っ掛からないヨ。大体あの男は、霊力を何時も垂れ流しているじゃないかね！」其々意見を言い終え、総隊長、山本元柳斎重國が杖を床に叩いた。

「合い分かった。では、引き続き、現世、虚園を調査する用に！以上解散！」

隊長や副隊長達が各隊に戻って行くなか、浮竹はルキアと共に廊下を歩いていった。

「浮竹隊長。一護の事なのですが…」

「朽木、自分の手で一護くんを探したいのだろう。」

「…はい。」

「朽木、阿散井くんと一緒に現世に降りて探して来るといい。」

「白哉には、もう話を通して置いた。」

「あ！ありがとうございます。浮竹隊長。」

だが、ルキアは気付いた！自分が抜ければ、副隊長としての仕事を浮竹隊長に全部押し付けてしまう事に…

「あの、隊長！！」

「大丈夫だよ、朽木。仙太郎と清音が私のサポートをしてくれる、朽木は、今、自分がしなければならぬ事をするが良い。」

今度こそルキアは、浮竹隊長に頭を下げ礼を述べた。
六番隊では…

「恋次。」

「はい、隊長？」

「今からルキアと共に現世に赴き、黒崎一護を探すように…」

「ルキアとですか？…分かりました！！隊長！！」

十番隊の一室では…

「隊長。ルキアと恋次が、現世に降りて一護を探すって言っじゃないですか!!」

「そうだな。」

「私達も現世に降りて探しましょうよ隊長!!」

と、言いながら、日番谷は松本の机を見た……突然部屋の温度が下り始めた!

「松本……」

「何ですか、隊長?」

日番谷は、拳を震わせながら静かに…

「俺が帰って来るまで、書類を片付けろと言ったハズだよな?」

松本は、これはヤバイ!と、思い逃げる準備をするが…

「え?えー!!!!」

すでに、逃げられない用に松本の足元が凍って地面から離れない!

「まっつゝもっゝ!!」

「きゃー!!!すみませーん!隊長ー!!!許して下さい。」

「誰が許すモノか！！キツチリ仕事はして貰うぞ！松本！！」

何時も逃げられている日番谷は、今日こそ絶対に逃がさない！と、意気込む！！

「ごめんなさい」

十番隊の一室では、松本が書類を終わらせるまで、一切外出禁止と扉を氷漬けにした。

雨乾堂にて、

「浮竹く居るかい？」

「入るよ浮竹。」

「享樂。」

「良いよ。横になっててさあ」

「いや起きるよ。」

「で、どう思うっ？」

「何がだ？享樂？」

「またまた、分かつてる癖に、」

「ふう…一護ちゃんが失踪してから空座町には、虚が出現率が上がった。これは偶然なのか？」

「だが、考えたくは無いのだが、一護くんは捕らえられて何処かに閉じ込められて居る可能性が有るかも知れない。」

「…それは、…或るかもね。」

「享樂、もしかしたら…四十六室が関わっているかも知れない…その上も…。」

「チヨット待つてよ！それは…否定はしないが…だが、現世には、浦原君と四楓院君が居て、尚且つ一護ちゃんの父親まで要るんだよ。そんな彼らが見過ごす筈がないでしょう。」

「それと、一護ちゃんも争闘強いんだからさ。」

「俺だつてそんな事は考えているんだからな享樂！」

「だが、まず一護くんを早く探し出さなければ…」

「（頼むよ二人供…）」

困惑（前書き）

次は、一護くんです。

困惑

一護は、薄暗い廊下をひたすら歩いていった。

それは、自分が何処を歩いて居るのか何処に居るか…いや…だが、此処は霊子が濃いから尸魂界に居る事はわかつている。

一護の腕には、霊圧制御装置が嵌められていて、多分壁は、殺気石だろう。

こんな場所に居たら体力だけじゃなく魂魄にまで影響してしまう。

まあ、霊圧制御装置が嵌められている時点で抵抗など出来ようがない。

「畜生！」

壁には、殺気石、自分の腕には霊圧制御装置で押さえられ、魂魄までもがダメージを負ってしまう前に何とか脱出したい。

「でも、俺を此所から出ないため…でも何故？」

奏功する内に一番奥の部屋へとたどり着いて部屋の中に入った…そしてドン！…と言う音が響いた。一護は、後ろを振り返り、

「な！」

さっきまで歩いてきた通路が無くなり、其処に在るのは壁だけになっていた。

一護は、仕方なく辺りを見渡し必要最低限の物と寝床が用意されて居る事を確認し、壁に寄り掛け窓の外に目を向けた。ふと見上げれば、小さな窓から見える月の光に照らされた月を見て…

「あいちら今頃どうしてつかないかな…。」

それは、現世に居る自分の妹、遊子と夏梨、親父、そして友人や仲間達の事を考えていた。

ここに捕まる前…

一護は、虚を察知し被害が出る前に倒そうと公園に来ていた。

そこでは、男の子がブランコに座り何処かキョロキョロと周りを何かを探す用に辺りを見渡していた。

見れば子供は霊体で、因果の鎖りが付いていた。

一護は、先程虚が彷徨っていて危ないので、先に男の子を魂葬させようと目の前まで行った。

声を掛けようと男の子の前まで行き、しゃがんだが…男の子は顔を上げた…

「捕縛！」

「な！！何だ！これ?!」

一護の足元から大きな陣の用な物が実現し体が動かなくなってしまう。

そして、男の子は一護の額に人差し指をあて…。

「お眠り下さい。黒崎一護…」

…そこで完全に意識を失ってしまった。

学校（前書き）

続きです。

学校

「おっはよーう、たつきちゃん、石田君、茶渡君！」

「おはよう、織姫。」

「おはよう、井上さん」

「ム…、おはよう、井上」

「あれ？今日も黒崎君来てないんだ。どうしたんだろう。」

と、後ろからダッシュで駆け抜けて来た人物、浅野啓吾である。

「おっはよー、皆の衆！おはようございます。井上…グアー…！」

たつきの右ストレートパンチが、決まった。

「何やってんだ！あんたは！織姫に指一本でも触れてみる！私が容赦しないからな…！」

「ズミマゼン」

「大丈夫？浅野君…。」

「気にする事は無いと思うよ井上さん、どうせ一護の事だから何処かバイトとか何かなんじゃないかな？」

あと、一護の親父さんが…

（家の馬鹿息子！まだ、帰って来てこないんだよ。朝早くから悪い

な小島君！)

…何て行ってたから大丈夫だと思うよ。」

と、啓吾の頭に乗った状態で、携帯片手で操作しながら話す水色。

「水色君！」

「おはよ、井上さん」

「おはよう、水色君」

「でも、ここ最近、黒崎君の霊圧が感じられないよ。やっぱり何か遇ったんじゃないかな。」

「ム、一護の事だから、尸魄界にでも行ってるんじゃないか？」

「だと良いんだけど…」

「ハイハイ、織姫は一護の事心配なんでしょう。」

「全く、一護の奴私の織姫を心配させる用な事をするんじゃないよ。今度会ったら一発殴ってやる！」

「たたた、たつきちゃん！！」

「お前らー、出席とるぞーっと。何だ？黒崎はまた休みか？おーい、誰か黒崎の行方しってる奴いるか？」

「……………」

生徒全員一斉に首を横にふる。

「そうか、仕方がない。誰か、黒崎に会ったら伝えるよ。卒業したいのならちゃんと学校に来いとな。お前らわかったな！」

「（それで良いのかこの先生？）」

「わーい！終わった終わった！次は楽しい楽しいお昼休みだよ！」

「ハイハイ、織姫はお昼になると元気イッパイになるね。」

「たつきちゃん、皆で屋上で御飯食べよ。」

「わかった。」

そして屋上で、

「皆で食べれば御飯が美味しいよ。」

「井上さん。」

「何？石田君。」

「黒崎は、本当に尸魂界に行ったのか？」

「だが、行ったとしても…コンを黒崎の中に入れて学校に通わせれば良いんじゃないか？」

「…。そうかも知れないけど…？」

「流石に、一週間以上も現世に居ないのはどうかと思つよ。」

「ム、なら一護の親父さんに聞くか？」

「「「！！！」「」」

「虚だ！」

上を見上げれば、一気に五体も出現した。

「石田君、茶渡君！！！」

「井上さん皆に三天結盾を…。」

「わかった！行くよ！火無菊、梅蔵、リリイ、三天結盾！私は拒絶する！！！」

井上の前に、三天結盾を張り、その裏に、たつき、啓吾、水色が後ろに…

石田、茶渡、井上は、戦闘準備を整えた。

「…ねえ？何で虚は襲って来ないの？」

と、たつきが言った。

虚は襲って来る処か、ここを見ずに、一定の方向を見て飛び立とうとしていた。咄嗟に石田は、直感でマズイと思い銀嶺弧雀を向け弓を引いていた。

虚は、何事も無く滅却された。

「何でいきなり五体も出現したのかな？」

「虚は、普通集団になって出現したりしないはずだ。」

「ましてや破面が近くにでもいるのか…？」

「オーイ！井上！」

「あ！朽木さん！！！」

「朽木さん現世に何時来ていたのかい？」

「到着したのは、今しがた着いたばかりだが…？。その時、ルキアの後ろから、」

「あ！恋次君」

「よ、元気か？テメーラって…あれ？」

「一護の野郎どうしたんだ？あいつは、教室か？」

「え？何を行ってるんだ阿散井！黒崎は、尸魂界に言ってるんじゃないのか？」

「嫌、あいつは尸魂界には、来てねえぜ。」

「何！では、あやつは何処へ行ったのだ？」

ルキアと恋次は、一護の霊圧を探した。

…が、無論霊圧は引っ掛からない。

「居なくなってから一週間以上学校に来てないんだ。」

「ところで、阿散井君。」

「何だ？石田。」

「君達二人は、なぜ現世に？」

「あー。最近、空座町に虚の出現率が上がってな、その調査だ。」

「だが、可笑しいのだ。此処ら周辺にだけ出現するのだ。」

「と言うわけだ。」

「だから、お前らも注意しろよ。」

全員納得した。

「あと、一護の件は私と恋次に任せろ！必ず何処かにいるはずだ。」

「ありがとう。朽木さん！」

「何、心配する必要はない。」

「んじゃ、またな！」

と、行ってルキアと恋次は飛んで行ってしまった。

学校（後書き）

先の話になりますが、一織が、一ルキにしたい。と、思っています。

心配

二人が、飛び去った後、

「黒崎くん……。」

と、心配する井上を全員が、宥めるように、

「織姫、大丈夫だよ。一護は、此処に戻って来るよ。」

「井上さん、一護の事だ、絶対皆の前に帰って来るって。」

「何か会ったら直ぐに朽木さんから連絡があるはずだ。」

「それでも……。」

「分かってるよ、井上さん。僕たちも全員同じ気持ち何だから。」

「ム……一護は、大丈夫だ。井上。」

「なあ、ルキア。」

「何だ、恋次？」

「石田達に教えなくて良かったのか？本当の事を……。」

「……石田達に教えた所で、一護が現世に居ないのは明らかだ。それに、井上を余計心配させる用な事を、私はしたくない。」

「一護の奴！何処に行ったんだよ。」

丁度その頃…

浦原商店の店主浦原喜助はある人物と密かに話していた。

その人物、黒崎家の大黒柱、クロサキ医院を切り盛りする黒崎一心である。

「わかりました。時間はかかりますが、必ずやりとげます。」

一心に、頭を下げる浦原。

「ほー、こ奴に頭を下げるかー。」

猫の姿で音も無しに現れたのは、四楓院夜一。

。猫姿では居るが、美しい黒い毛並みと自慢の尻尾がお気に入り。

「嫌だなあ〜夜一さん。」

扇子をパタパタと扇ぐ浦原。

「で、どうだった、夜一。」

「護挺隊は、気が付いたが何処に閉じ込められたのかは分からないじゃろつ。」

あやつらは、自分達の手で一護を強制的に捕えたのじゃな。

それと、一護の捕らえられてる場所は特定できた。

一護をどの様な手段を使って捕らえたかは分からぬがな…戦闘になれば、あやつらは皆、一護には敵うまい。それに、護挺隊が一護を捕縛する用な事もまずあり得ないしの。」

「…やつら強行突破するつもりじゃろうな。どんな手段を使っても…。」

「「……。」」

「息子さんは捕まってしまった以上、今は直ぐに手は出さないと思います…極刑される前に…何とか…。」

「…ち、あの連中…。」

浦原は、少し考える素振りをして、時計をみた。

「一心さん、もうそろそろ帰らないと娘さん達が帰って来てしまいますよ。」

「それと…娘さん達も大変ですね。色々と…ねえ。」

一心は、目をスーッと細めた。

「…嫌だな〜！冗談ですってば〜、」

「喜助、お前の冗談は、冗談を言ってるように聴こえん！」

浦原は、冷や汗を吹き出しながら扇をパタパタと、必死に扇いだ。

そして一心もまた時計を見るなり。そろそろ娘達が帰って来る時間なので帰る事に。

「…そうだな邪魔したな、浦原。」

「いえ、いえ。お気をつけて。」

猫姿の夜一は、お気に入りの座布団に腰掛けて、一心に、

「娘達にちよっかいを出して愛想尽されぬようにな！あの年頃の娘達は、繊細なんじゃから。」

と、ゲラゲラ笑いながら楽しげに尻尾を降っていた。

一心は、立ち止まり夜一の方に振り向き眉間の皺をよせ更に皺をプラスして…

「掘つとけ！大きなお世話だ、夜一！！」

などと、排他。

「あ！そうそう、朽木さんそちらに送って起きますねえ！」

「おう、分かった。」

そして、一心は自宅へと帰って行った。

……

「流石親子！！似てらっしゃいますね。」

「そつじやな。」

しばらくして、

玄関の戸を開け、

「浦原、浦原は、おるか？」

そこへ、大男…いやヒゲをはやしたオッサン…か…いや…これは失礼？

高位の術を使いこなす鬼道の達人、握菱鉄裁が姿を現した。

「これは、これは、朽木殿と阿散井殿。ささ、店長かお待ちしています。さ、中へ。」

ルキアは、テッサイが行った事を理解し…そして、青筋を立てながら中へ入って行った。…

中では、陽気に扇子を口元に持っていきながら…

「いやあくお待ちしておりました。朽き…グハ…！！！」

「何が！何がだ！お待ちしておりましただ！！このタワケが！一護が現世に居なくなってしまう理由、貴様知っておるだろう！！！」

ルキアは、浦原に思いっきり顎にチョップと腹に足蹴りを喰らわし
吹き飛ばした。

「ぐえ、い、痛いですよ！朽木さん！」

恋次がルキアに聴こえるか聴こえないくらいの声でボソッと…
…、

「うお〜こえ〜な〜。」

ルキアは、後ろを振り返り、

「恋次！貴様今何か言ったか！」

恋次は、何も言わず、ただ首を横に降ったのである。

「いや、何も要ってないぞ俺は…。」

そこで、浦原は、

「まあ此処で話するのは何です。中へどうぞ。」と、行って二人
を中へ通した。

夢（前書き）

申し訳ありません。

書き直し、又は、追加させて下さい。

この小説を見て下さってる方々誠に申し訳ありません。

― 護君どんどん追い詰められてる感じです。

夢

「ただいまー」

「おう、おかえり。」

遊子は廻りを見渡しながら、誰かを探している。

「お兄ちゃんは…まだ帰って来てないの？」

「あれから帰って来て無いぞ！その内帰って来るだろうよ。」

「お父さんは、お兄ちゃんが心配じゃないの？お兄ちゃんに、何か会ったら私許さないんだからね！！」

遊子は少し涙目になるが、そこは泣かない。

「遊子…父さんよりも一護を選ぶのか…父さん悲しい」

と、言いながら泣く一心に対して、

「お父さんいい加減早く子供離れしてよ！！」

一心は、一瞬固まり、

「！！母さん！！今日の遊子は何だか冷たいよ。」

と、言いながら真咲特大ポスターに向かって泣く一心を余所に、

「今日の晩御飯は何を作ろうかな〜！」

などと、一心に突っ込みも言わず、そのまま着替えをしに二階へ上がって行ってしまった。

しばらくすると着替えてきた遊子がせつせと料理を作っていく。

「ただいまー。」

「おじゃましますわ。」

「え？もしかして、ルキアちゃん。」

遊子は、台所のガスコンロを止め、玄関たで小走りで来た。

「帰りに偶然居合わせたんだ、ルキ姉が家に行く所だったから、一緒に連れてきた。」

「そっか！！取敢えず上がって上がって！！」

遊子は、目を輝かせながらルキアの手を取り、リビングに招き入れる。

「ねえ！ルキアちゃん。」

腕を引っ張りながら、リビングへ

「お兄ちゃんと一緒じゃあないの？」

「いいえ！一緒ではありませんわ。」

と、妙なテンションで返すルキア。

リビングに入ると娘達の父・一心と目が合い、

「おう、久しぶりだな、ゆっくりして息なさい。ルキアちゃん。」

「お久しぶりですわ、おじ様」

頭を下げるルキアに対して遊子は、

「ルキアちゃん、また暫く泊まってってくれるんでしょ！」

遊子は、更に目を輝かせながらルキアに強請る。

「ねえ、お父さんいいでしょ！」

「ルキアちゃんは家の大事な娘だ！いくらでも泊まっていきなさい
」！」

親指を立てながらウインクする一心。

「はい。ありがとうございます。」

「やったー！一緒に晩御飯食べよ。」

その後ろで夏梨は、考えて事をながらルキアを疑いの用な目で見つ

めていた。

そしてルキアは、黒崎家に泊まる事になった。

一護の部屋に入り戸を開けたとたん待つてましたと言わん秤にルキアに抱き着こうとする。

「姉さ〜〜うおおグウ!!!」

「コンお前は少し黙って居ることは出来んのか!」

ルキアはコンを掴んだまま、

「一護は、今居ないのだぞ!」

戸の後ろから声がした。

「ルキ姉!入るよ。」

「おお何だ夏梨?」

「次、お風呂入って良いよ。」

「ウム分かった。ありがとう夏梨。」

ルキアの手に持っていたコンを見て…

「そのぬいぐるみ私が見ててア・ゲ・ルね。ルキ姉。」

「おおそうか。では、頼む夏梨。」

コンは涙を流しながら夏梨に訴える。

「頼む夏梨〜遊子には〜」

「そんなのム・リに決まってるじゃん。」

「頼みます。神様、仏様、夏梨様〜許してえ〜!!」

「それじゃ安心してお風呂に入ってね。」

完璧コンの事は無視である。

「それだけわわわ…いやあ〜〜!!」
コンの悲痛な叫び声が響き渡った。

お風呂から上がりリビングに一心がビールを飲んで居たので、今回の事に付いて話した。

「済まなかったね。ルキアちゃん。」

「いいえ。理由は浦原から聴きました。」

「そうか…。」

「ですが、可笑しな話です。我々にも責任はあると思います。何せ一護の死神の力を取り戻させたのは我々護挺と仮面の軍勢を含む全員なので…。」

「それに、我々は後悔などしていません。一護の力を取り戻さなければ、一護はずっと一人取り残されていたに違いありませんから。」

「……………そうか。」

「それと話は別なのですが、遊子と夏梨の霊力が余り宜しくないのでは有りませんか?」

「んーそうなんだよな…ここ最近何だが、な」

「…!まさか虚が出現するのは、遊子と夏梨達が…!?!」

「まあ否定はしねえよ、事実だしな。」

「!!!心殿!!!」

ルキアは、徐に立ち上がって声の張上げてしまった。

「まあルキアちゃん座って、上の二人は相当疲れて寝ちまった用だからな聴こえてないが、一応遊子と夏梨には、お守りと、浦原から虚を寄せ付けない用にある程度の対策は打って在るんだが…それでも虚を寄せ付けてしまつ見たいでな、どう手を打つか浦原と話しをしていたんだよ。まさか、俺達がずっと一緒に居る訳にも行かないだろう。」

「確かに、そうですが…霊圧が極端に上がったたり下がったり…このまま続けば二人は何れ霊圧を制御出来なくなつて虚を更に呼び寄せてしまつかも知れませんか。」

夏梨は、夢の中にいた。

辺りは薄暗くそして寒い。自分は何処かに歩いて要るのだろうか？

ふと見上げれば、丁度雲が晴れて月が

此方に顔を出した用だ。

月が顔を出した所で周りの水晶が輝きだす。

夏梨は、月に照された一番大きな水晶を見ていた。水晶の中から暖かいオレンジ色に輝いた遊子が見えた用な気がする？

「遊子？」

ふと気が付けば後ろに誰かが要ることに築いた。見れば、髪は少し

長く（一護が最後の月牙を習得した位の髪）体から青く輝いて青年を照らす。

「待っていた。夏梨。」

「私の名は、……………だ。夏梨。」

「え？何ていったの？」

「聞こえないか？夏梨。…じゃ仕方ない。遊子と話をしてくるといい。」

夏梨の体から全部を包み込む用に光だし、そのまま眠りに付いた。

気が付けば、自分のベッド、隣を見れば遊子も同じ用に目を開けた。

「夏梨ちゃん。起きた？」

「うん。起きた…。」

「……………」

「夢の中に、夏梨ちゃんが見えた…。」

「私も遊子が見えた。」

「……………」

「この夢何だと思う。」

「私に聞かないですよ！私にも分からないんだから。」

「うん、そっだよね…夢の事お兄ちゃんに相談したいのに何時帰っ

て来るんだろっ…」

「ねえ、遊子。明日ちヨット付き合ってよ。」

「?っん、良いよ。」

「ねえ、夏梨ちゃん…何だか中途半端に目が覚めちゃったね。」

「そうだね。」

だがこの後二人揃ってまた夢の中へ

一護は、この部屋の中にどれくらい居ただろう。太陽が何回上がった何回下がったか何て分からない。脱出するため、色々試してみた。腕には、霊圧制御装置が有るため霊力は使えないので完現術を試してみた。完現術は確かに効果が在るが威力が足りないために、どうやって自分の体を外へ出させるか考えていた。代行証でもあれば、な。

遊子、夏梨、井上達心配し始めてっかもな…。

「はあ、外へ行きたい…。家に帰りてえー」

一護は、ブーツとしながら瞼から透明な液体が頬を伝って落ちてくる。

目を睨れば遊子や夏梨がいてそして井上とルキアが此方を向いて手を降ってくれている姿が見える。一護は、思わず笑みがこぼれる。

そして一護は完現術を使い続けオマケに霊圧制御装置と殺気石、体が思うように動かなくなっって疲労と睡魔に寄って眠りについた。

決意

「遊子…夏梨起きて下さい!!」

「……………」

気持ち良さそうに寝ている為、

「姉さん疲れてるからもう少し寝かせて上げた方が…。」

「ウム分かっておる。今日は休みだし、もう少し寝かせても良いのだが?…いやいや、やはり起こそうご飯が冷めぬ内に。」

などと、ブツブツと二人で会話をしていると二人が起き出した。

慌てて、コンはぬいぐるみバージョンに変幻：イヤイヤ元々アンタはぬいぐるみだって!!」「(?ぬいぐるみじゃないコン様だって言うてるだろ?)」「ああ〜ハイハイ。

「んう?あれ朝……………ああ朝御飯!?!」

遊子は、少し寝ぼけた為かボーとして一気に覚醒した。

「おはようございます遊子。」

「おはようルキアちゃん!」

ルキアの服から美味しいそうな味噌の香りが漂う。ルキアは、ニコニコしながら、

「それじゃ二人供着替えて顔を洗ってらっしゃい。そしたら朝御飯にしましょ。」

「はい。うん。」

二人は二階から降りてきた。

「ごめんね。ルキアちゃんに朝御飯作ってもらったやって！本当は私を作るハズだったのに。」

「二人供気持ち良さそうに寝ているから起こすのは忍びないので、それに、たまに休むのも良いのでは？」

「今日はルキアちゃんが朝御飯を作ってくれたんだね！」

「はい。冷めない内に召し上がって下さい。」
と、皆席に付いた。

「あれ？親父は？」

「ホントだ！お父さんは？」

ルキアは引汗を書きながら……

「朝早くから会合だと言って出掛けましたが？」

「ふう〜ん。」

「そうなんだ。」

三人は、席に着き。

「いただきます（わ）」「」

と、行って食べ始めた。遊子は、味噌汁を突つきながら……。

「あれ？このワカメとメカブ家にあつたかな？」

「ああそれは、彼方から持って来た物ですよ。兄様が沢山買ってしまつたのでお裾分けに持って行きなさいと。他にも在りますよ。乾燥ワカメと生ワカメとメカブを持って来たので沢山召し上がって下さい。生ワカメとメカブは冷凍庫への保存が可能なので冷凍庫に入れました。」

その頃、浦原商店では……

「……………いただきます」「……………」

「……………」

「恋次君どうしたの？」

と、井上が聴いてきた。何故井上は、どうして浦原商店に居るかと言つと、黒崎君が心配で家に居る事が出来ず浦原の所まで押し掛けてしまつた為此处に居る。

「どういたしました？阿散井殿？」

「うおー顔が近けえつて！！」

「で、どうしましたか？阿散井さん？」

「これは…どうしたんだ？」

と、言つて指を刺す。それは…味噌汁の中に有るワカメ…ではなく、隣に有るヌルヌルとした食材で有る。

「ああこれは朽木さんが尸魂界から送つて来てくれた物つすよ。」

「（ワカメの他にメカブが…バ、バリエーションが、ふ、増えてや

がる……!!こ、これは……もしかして!?!隊長勘弁して下さいよ……)」

「美味しいですぞ!阿散井殿!ささ、阿散井殿も早くお食べなさい。健康に良いですぞ!!」

「美味しいよ恋次君??」織姫訳も解らず頭を傾げながら食べる。

「……………」

その頃……一心は、尸魂界にいた。

そこには、一番隊・総隊長・山本元柳斎重國を始めとする、二番隊・碎蜂、四番隊・卯ノ花烈、六番隊・朽木白夜、七番隊・狛村左陣・八番隊・享樂春水・十番隊・日番谷冬獅郎、十一番隊・更木剣八、十二番隊涅マユリ、十三番隊浮竹十四郎の錚錚たる顔ぶれである。

「我々としても全身全霊を持ってアナタの息子さんを救出したいと思っております。」

一心に、頭を下げる隊長達、そしてその中で頭を下げずに総隊長は、

「今回は、話し合いで決着しなければ、我らも……手段は選ばざる終えないと思おて降ります。」

一心の肩に乗っていた、猫姿の四楓院夜一が、隊長全員に言った。

「だが、万一話し合いで決着せぬ場合、手段は選ばぬと言ったが、お主ら隊長の身じゃ限度が有る。その場合、無茶はせぬ用に、良いな。」

全員頷いた。

書く(前書き)

話が強引だけど頑張ります。

晝く

一心は、人通りの少ない廊下を歩いていた。

「夜一さん、一心さんどうでしたか？」

目の前に浦原がいた。目深に被った帽子と全身真っ黒、その服は、前に平子達を助けるために使用した霊力を遮断する物である。

「ウム、隊長連中は皆、四十六室に直談判するつもりじゃ。しかも、白夜坊は、災厄の場合、四代貴族の地位をも利用するらしいからの。」

「ありやりや！？これは凄いですねえ。」

「所で喜助、お主の用事は済んだのか？」

「はい。バッチリつすよ。夜一さん！まあ、万が一、ですからねえ。」

「これは、遊子殿と夏梨殿。」

「今日は、どのようなご用意向きで此方に？」

「うん。あなたの所の店長さん居る？」

「いいえ。只今外出中でして。今日は夜に帰って来る予定だと思いません。」

「店長さんが居ないなら良いよ。また時間を開けて来る。」

「左様ですか。」

遊子と夏梨は仕方なく帰る事に、それまでの時間を遊子が今夜の晩御飯の買い出しをしたい！と、言い出したので買い出しへ行った。

……が、その途中。

遊子と夏梨のピタリと足が止まり、体が急に重く押し掛かる。

「何!?!」

突然空に黒い穴の用な物が幾つも開いて、そこから化け物が沢山出て来る。二人は啞然としていたが、夏梨が正気に戻り、

「遊子!逃げよ!!」

遊子は放心状態で、啞然とさせる中、痺れを切らした夏梨が遊子の腕を掴み思いつきり引っ張って逃げる。だが、逃げても逃げても体が重苦しく何処までも追っかけてくる感じで一向に向上しない。

「キヤーー!!」

夏梨は後ろを振り向くと遊子を捕まえ用と手を伸ばすが、夏梨は遊子の腕を自分の方に引っ張り虚を足で蹴飛ばした。

「うりゃー！！嘗めんな！！」

更に、もう一匹

「オマエ、ウマソウ」

「！夏梨ちゃん！」

後ろを振り返り見た。

遊子は虚との間に又もや捕まえ用と手が伸びたが、合わないと思った瞬間…！

突如遊子を守る用に、光の壁が現れた。

「！？」

虚は、光の壁にぶつかり吹っ飛んだ！

訳の分からない光景と強い光に遊子は混乱し気絶してしまった。

夏梨は、化け物がなぜ飛んで行ったのか、訳が分からない状態だった。

そして、遊子を守る光が消え地面にコトンと落ちた。拾えば、親父にもらったお守りで

「（このお守りは、昔、母さんが遊子と夏梨の為に作った、ありがたいお守りだ！！肌身離さず持っていないさい！）」
なんて言ってたっけ…。

「ギャヤヤオオー！！ナンダコレハ……」

「！！！」

後ろに吹っ飛んだ虚が再び襲ってきた！

夏梨は、咄嗟にお守りを投げ、遊子を背中に乗せ逃げ出した。

その頃、尸魂界では、

「ご報告申し上げます。」

突然隊長達の目の前に、裏挺隊が現れ皆に告げた。

「何事だ。」

「十二番隊技術開発局より報告。現世空座町に多数の虚が出現。中には、大虚、破面を確認。至急応援要請との事です。」

一番隊舎に集まっていた隊長格は啞然とした。

だが、総隊長は、

「分かった。」

その隣にいた碎蜂が一步前に出た。

「この事を、四楓院夜一様にも報告せよ。」

「御意。」

「たく、しつこいんだよ、はあ、はあ、はあ……」

「っ！！！」

やがて体力の限界に近づいたのか遊子を背負ったまま転んでしまい、虚が遊子の体から魂を引つ張り出してしまった！

「遊子！！」

「ドコミテイル」

遊子に気を取られ自分までもが魂を抜かれてしまった。

右手には遊子、左手には夏梨の魂を抜かれた状態で握られ身動きが取れない。

しかも遊子は鎖がちぎれ二度と肉体には元に戻れない状況になっていた。

それは完全なる現世の死を意味する。

「サテ、ドレヲクオウカ。ヤハリ」

などと、虚が考えて居たとき、遊子が目を覚ました。

「???え!?!」

遊子は、今の状況が解らずなぜ自分は宙に浮いてるのか?なぜ、自分の体が目の前に横たわって居るのか?なぜ夏梨ちゃんと一緒になつて横たわって居るのか?なぜ、自分の体は動かないのか?疑問ばかり浮かぶ?

ふと横を見ると同じく宙に浮いて……嫌、捕まって……更に横を見た!

化物が今にも口を開けて遊子を飲み込もうとしていた。

「キヤーーお兄ちゃん夏梨ちゃん!!!」

「遊子!離せ!この〜!」

夏梨は、動かない体を必死に動かすが魂の状態では俊敏に動かす事など出来やしない。ましてや虚など相手にも出来ない…が、今度は別の虚が現れ

「グギーー!!!」

目の前の虚を攻撃して倒してしまった。

ドサツ!

「うう!」

「キヤー!」

二人は地面に叩きつけられた。

その間虚は三体実現し夏梨と遊子を見るなり手を伸ばす

「キヤー夏梨ちゃんお兄ちゃん」

遊子は涙を流しながら泣き叫ぶ!

夏梨は動かない体を必死に動かし、姉の元へ行くが因果の鎖がそれを阻み手を伸ばす。

「遊子!!!」。

遊子が消えちゃう!本当に遊子が消えちゃう!嫌だ!家族が消えちゃう!強くなりたい!一兄見たいに強く鳴りたい家族をあんな化物なんかに!!!遊子を失いたくわない!

強い力が欲しい…家族を守る力が欲しい!!!

『ならば私を使え!』

「え？」

ルキア、恋次、石田、茶渡井上達は、虚が出現した為その対応に負われた。

「何でこんなにも虚が出て来るんだよ！！」

「知るか！！さつさと虚を倒さんか！馬鹿者！」

「（だが、何故こんなにも虚が出て来る？やはり！）」

「行くぜ！蛇尾丸！！」

恋次は、自身の斬魄刀を掴み地面を強く蹴って上空に！

「椿！お願い！」

織姫も、虚を次々と倒して行く！

「！朽木さん！！これって、もしかして！！」

「かも知れない。」

「！！遊子ちゃんと夏梨ちゃんが！！でも、でも！！さっきから霊圧

が！霊圧が感じられないよ！…どうしょ朽木さん！！」

そこへ、尸魂界に行っていた三人が現世に戻って来た。

「皆、無事か！」

「……………はい。(ム)……………」

すぐさま織姫は、遊子ちゃんと夏梨ちゃんの父・黒崎一心に話をした。

戦い（前書き）

これから先、色々突っ込みたい所はあると思いますがそこは穩便に
宜しくお願いします。

戦い

夏梨は、この前と同じ夢の中にいた。周りが水晶で囲まれて、空は夜、月が輝いて周りの水晶がキラキラ輝きとても綺麗だ。

そこへ、前にも出てきた青年が、自分の目の前にフワリと現れ夏梨に、

「力が欲しいか？…姉を助けたいか？…家族を守りたいか？」

「！！力が欲しい！遊子を助けたい！家族を守りたい！」

「ならば…私を使え！夏梨！！私はお前の力その物。お前が望めば、私は、いくらでも力を注ごう。だが、お前は、今の私の名を呼ぶことは不可能。」

「???ならどうしたら、どうしたら遊子を助けられるの？」

その時、夏梨の後ろの水晶が輝き、中から女の人が映った事で青年は頷いた。

そして夏梨は遊子を助けたい一心で青年意外周りに目が入っていない為、築かない。

「…夏梨。」

夏梨は、呼び掛けられたので青年を見た。青年の右手から棒の用な槍の用な物が出現し、夏梨の目の前に差し出した。見れば、淡いオレンジ色に輝いて何だか暖かく優しい感じだが一瞬とてつもなく降られてはいけない用な感覚にもなる。

「これを奴に投げる。そおすれば奴は跡形もなく消える。」

「それで、遊子は助かるの？」

青年は、頷き、夏梨に渡した瞬間爆風が舞った。夏梨は思わず目を瞑り体から光が惑い現実世界に戻って行った。

ルキア、井上、一心は、

舜歩を使つて妹達の所に掛けていた。勿論一心が井上を左手で支えながら織姫は必死に振り落とされぬ用に一心にしがみついている。右手には、残魄刀を手に虚を倒して行く形で。

虚を倒しながら進んでいた為思う用に進まなかった。

「これでは拉致が空かない。織姫ちゃん悪いけど少し吹き飛ばされない用にしがみついてくれるかい？」

「え？は、はい！」

「それと、ルキアちゃん俺の後ろに下がって！」

「は、はい、承知した。」

ルキアが、一心の後ろに着くと、一心は斬魄刀を強く握り直す。

そして、

「はあああ!!!」

人降り横に降れば視界に入っていた嘘は全て消し飛んだ。

「ルキアちゃん先を急ごう。

…もう良いよ。織姫ちゃん。」

「え、あ、はい!!!」

「（流石は一護の父親殿だ！人振で虚を全滅させてしまうとは…）」
と、思いながら遊子と夏梨が居る場所まで舜歩て急ぎ向かった…。

「遊子と夏梨の霊力はどの辺にあるかだいたい分かっています。ですが突然消えてしまつて…早く探さねば…。」

「何だか嫌な予感がするな！織姫ちゃん、ルキアちゃん、手分けして探そ…!!!」

突然ゴゴーンと言う音が響いた

「「「!!!」」」

「何だ！この霊圧は!」

「もしかして、夏梨ちゃん!!!」

三人は急いで目的地を目指した。

「遊子を離せ!!」

「ナンダコノガキ……」

「遊子を食らうなー!遊子を返せー!!」

更に夏梨の体から青色の光が浮き上がり虚は夏梨を持っている事は出来なくなり夏梨を投げ飛ばした。

「ッ!」

暫くすると遊子の体からオレンジ色の光が、虚は遊子も握る事は出来なくなり遊子までも手放した。

上空

「遊子!夏梨!」

ルキアが一方踏み出したのを一心が止めた。

「待て!ルキアちゃん。」

「何ゆえ止めるのですか!!」心殿!」

そこで織姫が、

「でも！早く助けないと遊子ちゃんと夏梨ちゃんが！」

必死に訴える二人に対し一心は、

「遊子と夏梨の霊圧が上がってる。それに…。」

そこで、一心は、言葉を区切り目を細めた。

「オマエラ・ナンナンド・オマエラ・クエバイツガ…！！」

夏梨は手には、オレンジ色で透き通る槍の用な物で虚目掛け投げた。

「やーあああ…！！」

槍は、見事虚ろに命中。

「ぐあああ…！！オマエラヨクモ…！！コレデカッタトオモウナヨ！」

虚は断末魔の叫びながらと共に消えた。

「…何！虚が消えて行く！」

ボタンと夏梨は倒れた。

「…遊子！夏梨！」

「夏梨ちゃん！遊子ちゃん！」

「……。」

三人は、地面に降り立ち、ルキアは遊子の所へ状態を確め直ぐに鬼道で手当てし、悲痛な面持ちで因果の鎖が切れている事を確認した。井上は、夏梨を抱き上げ何処も怪我をしていない事に安堵し又心が張り裂けるほど悲しい衝動にかられた。

そして、一心は、無意識に手の感覚が無くなるほど爪を立て手を握りしめて二人を見つめていた。

…が、織姫が夏梨を抱きしめ体に戻そうとしたが、

「キャ！！弾かれた！！！」

因果の鎖は繋がってるのに何故弾かれたのかが分からなかった。一心は、正気に戻り夏梨と織姫の所に近づく。

手を因果の腐りに手を伸ばし調べたが。

「原因がわからない……此処で考えても拉致が空かねえ、取り敢えず浦原の所に行こう織姫ちゃん。」

「はい。」

「ルキアちゃん！まず二人を浦原の所まで連れていくぞ！良いか？」

「はい、大丈夫です。分かりました。」

そして、遊子の魂魄はルキアが、遊子の肉体は織姫に、そして夏梨の体と魂魄は一心が運んだ。

心配

遊子は、夢の中にいた。

「遊子！遊子！！起きて！」

自分の頬に暖かな手が添えられ、瞼がそっと開く。見れば女の人が目の前に立っていた。

「やっと話す事が出来た。」

女の人にはこやかに微笑む。

「誰ですが貴方は？」

「私は、……です。」

「え！き、聞き取れないよ？」

「遊子はまだ私の名がまだ分からないのね。」

「??？」

女性は遊子に微笑むが、何処か悲しげな目をしている用な感じにも見える。

遊子は、困惑しながら周りを見渡した。

あの時の夢みたいに空が青空で、太陽がでていない為か、水晶が輝きを失なっている用な気がする。

「遊子。妹を今、暗闇から外へ出さなければならぬの。力を貸してくれる。」

「……え？夏梨ちゃん？此処の何処かにいるの？」

慌てて周りを見渡すが、何処までも水晶が彼方此方にあるだけで夏梨の姿は何処にもいない。女性は首を横にふるう。

「違うの遊子。妹は、此処にいるの。」

と、言っただけで自分の手を遊子の胸の辺りに触れる。

夏梨も又夢の中にいた。夏梨は、水晶が立ち並ぶ中に一人走っていた。何処を走っても青年の姿が見えない。声を張り上げて呼んでも、青年は自分の所に来てはくれなかった。周りを見渡せば、空は曇り、月が輝いていない。水晶も輝きを失なっている。どうしたら良いか分からず立ち尽くす以外分からなかった。

が、誰かが自分を呼んでいる用な気がして、ふと水晶を見た。

「遊子？そこにいるの？」

水晶の中に遊子が映っている事に築き慌てて水晶に駆け寄った、が、水晶から突然暖かい光と風が吹き夏梨を包み込み水晶の中から腕が出て来て夏梨の腕を捕えた。慌てて夏梨は、腕を振り払おうとするが、意識が朦朧とし眠りについてしまった。

その頃、虚達は護挺十三隊と現世組のお陰で一掃できた。

この出来事が何故起きたか原因を調べる為に、調査隊が配置され調べる事になった、が。

ある一部の人間は、この原因が、わかってしまった為に、後に話し合いと言う形で報告しなければならぬだろう。

浦原、ルキア、井上、石田、茶渡、一心、猫一匹(?) 〓え、あ！も、申し訳ありません夜一様(；；)は、浦原商店に集まっていた。

「一心さん、申し訳ありませんが遊子さんと夏梨は二度と肉体には戻れません。」

「……………」

「そんな!! どうして戻れないの!!」

「まさか、井上さんが夏梨さんを戻そうとした時何らかの理由で弾かれてしまったからなのか? だが、現に夏梨さんは因果の鎖は、ちゃんと付いているじゃないか!!」

「そうだぞ浦原! 何故戻れぬ! 遊子は因果の鎖が切れておるが夏梨の鎖は切れておらぬのだぞ!」

「何故でしょうね？」

「「「浦原さん！……！」」」

「「……。」

「

この時、石田とルキア、茶渡の三人は、浦原に怒りをぶつけ、井上は顔が真っ青になり遊子ちゃんと夏梨ちゃんの兄、一護君に何て説明したら良いのが、わからなかった。

「流石双子と言つか、遊子さんと夏梨さんの体は繋がっています。」

「「「？」」」

「「……。」

それは魂と魂が繋がっていて霊力その者を共有していると考えられるからです。

「「「？？？？」」」
「「……。」

ですが、問題は遊子さんの方ではなくむしろ…

「夏梨か？」

「おじ様。」

「ええ。」

「夏梨さんは今、肉体と魂魄の間には、因果の鎖に亀裂が少事、かろうじて繋がっているためまだ生きている状態です。遊子さんは因果の腐りは完全に裁ち切れている状態ですので略死んだ状態になりますが、遊子さんが夏梨さんを引っ張って完全なる肉体の死を防いでる状態ですのでこれが何時まで続くか分かりません。」

「肉体に戻れなければ、そのまま死を迎えて虚になるのを待つだけですからね。」

「…其処で、遊子さんと夏梨を死神へと考えていますが如何でしょうか。」

チラッと一心を見る。

「二人をか…!!」

「そんな…!!」

「「な!ム!」」

「「……。」」

このままだと夏梨さんも因果の鎖が完全に裁ち切れて、恐らくお二方は魂葬も出来ないでしょう。まあ一度試しにやってみますが恐らく無理でしょうね。」

「今の遊子さんと夏梨さんは以前の黒崎さんと同じくらい霊力が人並み以上です。なら二人に掛けて見ませんか。」

今まで黙っていた一心が口を開いた。

「夏梨の鎖を完全に断ち切れと……」

その後沈黙が続く……

隣からテッサイの声が皆に響いた。

「店長、遊子殿と夏梨殿が意識を取り戻しました。」

「……わかりました。それでは行きましょうか。」

事実（前書き）

パソコンは、持ってるけど、ネットに繋がってない。悲しい。

事実

「うう？あれ私…私は、…！！夏梨ちゃん！！！」

周りを見渡せば自分達の部屋ではない事に戸惑っていたが、隣に寝ている夏梨の姿にポットするのも束の間。

「夏梨ちゃん起きて？あれ！？…夏梨ちゃんが…二人？…それにこの鎖、何？」

遊子は、自分にも付いている、切れた腐りに触れた。そして、更に隣を見れば自分自身が横に寝かされている事にも築いた。

「……………」

夏梨を見れば、腐りは更に隣に寝ている夏梨に繋がっていて、不思議に思いながらも、

「うう…ん…ここ何処？遊子？…遊子！！！」

勢い良く起き上がる。遊子の腕を掴み激しく揺さぶる。

「遊子？遊子？えっと！えっと！…さっき目の前に居なかった？」

「…夏梨ちゃん。」

「何？」

遊子は隣を指差す。夏梨は指の先をたどると自分と同じように隣に寝ているのがわかった。

「?…え!?何で自分が…何この鎖？」

自分が何で寝かされて横たわっているのか?此処は何処かなのか?考えていると

襖が静かに開いた。

「起きましたか?お二方?チヨイト失礼しますよ〜ん。」

「おっさん?おじさん？」

何時もの飄々とした態度で部屋に入ってきた浦原と、続いて入ってきたのは、井上とルキアである。

「「姉姉!ルキアちゃん!」「」

「遊子、夏梨」

「夏梨ちゃん!遊子ちゃん!」

神妙な面持ちで部屋に入ってきた。

何セルキアは、死神の格好に腰に刀をさして来ていたのだから、夏梨はルキアが死神だと知っているが、遊子は死神だとは知らない。

「…ルキアちゃん?その格好は?その刀は?何で黒い着物を着てい

るの？」

と、疑問の言葉投げ掛ける遊子を不思議に思つて居る夏梨。襖の奥から聞き慣れた声が聴こえてきた。

「遊子、それは死神と言ふんだよ。」

「え？お…お父さん??」

「親父!!」

二人は父親を見て目を丸くする。無理もないルキアと同じ格好をして腰に刀を刺して居るのだから…、しかも自分達の父親が幽霊を見れない触れない感じないと思つていたのだから驚くな、と言つ方が無理な話だ。

此に逸早正氣に戻つたのが夏梨である。

「親父も死神だったのか!!…それじゃ一兄も…?」

「知っている。」

「やっぱり。」

「?…驚かないのか？夏梨。」

「驚くも何も。親父…私達にお守り渡したたる。母さんが昔、私達に作ったお守りだ!とか何て言つてたじゃないか!!」

だが、遊子は、この話しに付いていけず困惑するばかり、見兼ねた井上が遊子に分かりやすく説明をした。

まず、貴方の父親は死神である事、そして兄、一護も死神である事、

そしてルキアもまた死神であると言つことを話した。
のだが、遊子は、死神？
と、言う言葉を理解していない為、混乱した。

「そろそろ宜しいでしょうかねえ。本題に入りましょうか。」

皆一斉に浦原の方に振り向く。

「まず、遊子さん。」

「は、はい。」

「あなたの肉体は死んでしまいました。」

「そんな!!」「……え?」

夏梨は、驚きの余り遊子を見た。遊子は、余りの衝撃事実困惑し
一心をマジマジと見た、が…。
一心は、頷き本当に自分が死んでしまったのだと理解した。遊子は、
暫くすると瞳から止めどなく涙が溢れ止まらなくなってしまった。

「うう、う、うわわわん……」

一心は、ただ娘を見守る事しか出来ず。

織姫とルキアは、そんな遊子ちゃんの側に寄り添って心が落ち着く
まで側にいてあげる事しか自分達には出来なかった。

「それでは、夏梨さん。あなた何ですが…まだ、あなたは生きてい
ます。」

「…?私も遊子と同じで死んだんじゃないの?」

「いや、夏梨。お前はまだ死んじゃあいねえよ。」

「どう言う事？それに、まだって？」

「言葉通りの意味つすよ夏梨さん。あなたには、いくつか遣ってもらう事があります。」

「…で、私は、何をすれば良いの？」

一心は、立ち上がり夏梨の肉体に近づき、夏梨を手招きした。

夏梨も立ち上がり、目の前に自分自身が横に寝かされているのを見て言葉を詰まらせ立ち尽くしてしまっただが。

一心が、夏梨の腕を掴み引き寄せ抵抗出来ない用にお腹に腕を廻わした。

「…わ…！」

「何ポート突っ立てるんだ夏梨。」

「な！う、うるさいな髭！！放せ！放せよ！！！」

精一杯抵抗し腕と足をばたつかせるが、後ろから腕を廻わされて体が宙ぶらりんにされている為抵抗の仕様が無い。
見兼ねた浦原が、ニコニコしながら、

「一心さん、其の位にして上げませんか？娘さんチヨット可哀想で

すよ。」

一心は、夏梨を静かに下ろした。…が、

「先から放せって言うてるだろうが！！この髭親父が！！！」

「ううー！！」

夏梨が、見事アッパーを入れノックアウトした。

「うおー！見事だ。夏梨！」

一心は、直ぐに復活し親指を立てリアクションをしながらニコニコと笑う。

「ふう、

やっと夏梨らしくなったな。」

「あー！！」

一心は、先程とは打って変わり真面目な顔をしながら立ち上がり夏梨に向き直った。胸に付いてる因果の鎖を掴み手のひらを胸にあて回復系の鬼道を使った。

「……………？」

「んじゃ夏梨。自分の肉体に入ってる。」

「えっどつやって？」

どうやって、自分の体に入るのかが分からず、困惑していると、心の手が夏梨の背中を押した。

「きゃー！」

バランスを崩して自分の体にダイブする形になってしまい、夏梨の体が一瞬元に戻った……が、やはり弾かれてしまい魂魄は後ろに吹っ飛んで、一心が後ろでキャッチした。

「きゃー！！ううう。」

夏梨は、余りの衝撃に耐えられなくなりへたり込んでしまった。

「やはり駄目っすか。参りましたね。どうします？一心さん。」

「

「……………」

「一心は、何も言わず娘を見ている事しか出来なくなっただが、

「少し時間をくれ、浦原。」

「はい。分かりました。では、皆さんチョイト席を外しましょうか。」

と、言っつて皆席を外した。

聴て、その部屋は、一心と遊子、夏梨だけとなった。

一方的（前書き）

すいません。隊長格を全員四十六室に出すなどと言っておきながら
…全然出してません。

— 護君、全然喋ってません。

それでもOKと言う方のみ宜しくお願いします。

一方的

一番隊舎にて、山本元柳斎重國率いる隊長、副隊長達が顔を勢揃いしている。

勿論、現世に居る副隊長ルキアを除く。

「今回四十六室に出向く事が出来るのは、この儂と卯ノ花のみとなつた。」

「そんな！我々も行く事は出来ないのですか元柳斎先生！」

「山じい、何とかなんないの？僕達もさあ、行きたいんだけどさあ。」

「だまらっしゃい、儂も何度も論議を唱えたが認めて貰えず、やつと卯ノ花を召喚出来るまで漕ぎ着けた。」

「チィ、四十六室は、何処まで強引なんだ。」

「我々も行く事は来ない、と言う訳か。」

「黒崎一護の容態は大丈夫で在るうか？」

「アイツが居なくちゃ殺し合いが楽しめねえ。」

粕村は、黒崎一護の容態は大丈夫だろうかと心配し、更木は、殺し合いがいなくちゃ楽しめないなど様々な意見が飛び交う。

また、副隊長達も各々意見が飛び交い隊首会は長引いた。

そして、中央四十六室にて、総隊長山本元柳斎重國と四番隊卯ノ花烈が門の前に立った。

中央四十六室にて、総隊長と卯ノ花烈、黒崎一護が論議を繰り広げた。

勿論四十六室の中に入れたのは総隊長と四番隊の卯ノ花烈二人だけで、黒崎一護の体調管理を兼ねて卯ノ花を入れただけだった。

黒崎一護は、椅子に座り、意識がないのかピクリとも動かない。

「我等護挺十三隊は、四十六室に定義し、黒崎一護を此方へ引き渡して頂きたい。」

「何故黒崎一護を其方へ引き渡せなければならぬ。黒崎一護は、藍染惣右助を倒し死神の力を失い人間に成り下がった。そこへ、其方達が黒崎一護を死神に戻した。これは重大な違反で有る。」

「確かに、黒崎一護は、護挺十三隊を救い現世をも救いました。ですが今更ながら捕縛するとは如何なる所存か。」

「黒崎一護は、現世に大量の虚を呼び寄せ人間に被害をもたらした。よって我等四十六室は、黒崎一護を捕縛し捕らえた。」

「しかし、黒崎一護を捕らえた後も現世には、一度大量の虚が出現

しているでは有りませんか。」

「確かに虚はに出現した。だが、黒崎一護が現世に多大な影響を及ぼした事には変わりない。以上これにて閉廷する。」

「お待ちく」閉廷する。これ以上の発言は却下する。」

黒崎一護に寄り添い、体を調べていた卯ノ花が定義した。

「お待ち下さい。四番隊、卯花烈の発言の許可をお許し下さい。」

「……許そう。」

「ありがとうございます。黒崎一護は今、霊力の低下、魂魄によるダメージ、極度の疲労、昏睡状態、栄養失調により衰弱しきっています。」

我等四番隊で、黒崎一護を看護させて頂きたく思います。

「……少しまで……。」

四十六室は論議の末。

「……許可を許す。だが此には条件が有る。」

「はい。」

「……………」。

「え!!!!」

「何と!!!!」

二人は、驚き言葉を詰まらせた。

戸惑い

暫くして、父、一心と娘達三人だけとなった。

「遊子。少し落ち着いたか？」

「うん。私、死んじゃったんだよね。もう、…此処に居ちゃいけないんだよね。…ルキアちゃんが言ってたけど戸魂界って言う所に行かなくちゃ…い、行けないんだよね…。」

止まっていた涙が再び頬を伝い流れる。そんな遊子を一心は、自分の所に引き寄せ袖を使って涙を脱ぐってやり、手を顔の前に持っていた。

「そんなに泣くと母さん譲りの美人の顔が台無しになっちまうぞ！ほら、顔を上げて。涙を吹いて…また真っ赤に腫れ上がっちまう！」

「え？な、何するの！」

突然顔の前に手を覆ってきたのでビックリしたが、暫くすると泣いて腫れ上がっていた熱はヒンヤリして冷たく気持ちよい。一心が鬼道を使い顔の腫れを元に戻した。

「ほら元に戻った。」

遊子は、目を瞬きしながら一心が頭をポンポンと乗せ遊子を落ち着かせる。

「よし、そんじややりませうか。……夏梨、お前はもう二度と肉体に
戻れない事がわかった。」

「え!!!」

「やっぱり戻れないの?」

一心は頷き、立ち上がった。腰にぶら下がってる刀の柄を握った。

「!!!」

二人は当然身構える。…が、

「安心しろ、これでお前達を切る訳じゃあねえからな。」

そう言うなり、夏梨に近づき因果の鎖を掴み刀をあて断ち切った。

「あ、切れた。も…もしかして…これで私も遊子と同じ死んじやつ
たの?」

一心は、頷きながら刀を納めた。

「……………」

「それじゃもう私も向こうに行かなくちゃ行けないの。」

「…そうなるな。」

「……………」

遊子も夏梨も俯いて何も言葉にならない。

「本来なら尸魂界に行かなきゃならねえ。…が…」

「そこで質問だ。遊子、夏梨、お前達二人は、何か一護に相談したい事があったんじゃないか？」

「「え？」」

「一護が帰ってきたら相談しなきゃ！とか言ってたんじゃないか？」

「「うん。うん。」」

「あるんだな。相談したい事が…。例えば、夢の話とか。」

「「！！！！！！」」

二人は、目を丸くし互いを見る。まるで何でそんな事が分かるの？…と、驚きを隠せない。

「なるほどな、それじゃどんな夢だ？詳しく教えてくれ。」

遊子と夏梨は、父親に夢の事を話をした。

最初は、授業中や昼休み問わず、急に眠くなり、気が付いたら周りが水晶に囲まれている場所に立ってたり、それが慣れると人が目の前に立って手を差しのべたり、その手を取ろうとすると夢から覚めちゃう、と言った内容で一心は普段オチャラケの顔とは一変、真剣な顔で聴いていた。

「分かった。他には在るか？」

「うん。夢の中の人が名前を言ってたけど…うん全然聞き取れなくてよく分からなかったよ。」

「あ！そうそう。私も同じことあった。名前を言ってくれたけど全然分からなくてそのまま何だよねえ。」

「！！」

一心は、ビククリしていた。斬魄刀が呼び掛けられる所までは良い。それを会話までして、斬魄刀が名を聞かせるとは…。

後は、キツカケを与えさえすれば直ぐにでも死神になる所まで来ている事に。

「ねえ、お、お父さん。私達の体どうなっちゃうの？」

「ん？ああ、ちゃんと保存しとくぞ。」

「保存？だって私達死んじゃったんでしょ。」

「まあ、後のお楽しみだ。」

「「？？」」

「それより遊子、夏梨。向こうの部屋に浦原が居るから呼んできてくれ。」

「はい。うん。」

その頃、浦原達は…、

「どうやら一心さん腹を決めた用っすね…。と、言うことは、魂葬もさせていませんね。まあ、できない…でしょうね。」

「息子が死神に成ってしまつて、次は娘の遊子と夏梨達じゃ。父親としては遣りきれないじゃろうて。」

お気に入りの座布団に寝そべる（猫）夜一様と陽気にお茶を啜る浦原。

「そつかあー。遊子ちゃんと夏梨ちゃん死神になつちゃうのかあー。黒崎君絶対怒るよねえ?」

「当然だ！遊子と夏梨を死神にさせる事態、言語道断だろな。」

「黒崎の事だから多分荒れるんじゃないか?」

「ム、一護の事だから多分…じゃ済まないと思うが…。」

「やはり黒崎さんが聴いたらただじゃー済みませんかねえ。」

「まあ、大丈夫じゃろう。コテンパンに殺られるのは父親と此処に

居る浦原の二人だけじゃろつて。」

「え！あ、あたしっすか！！一心さんなら分かりますが、何で、あたしが…」

「観念するんじゃない。」

ゲラゲラ笑う夜一に、当然浦原の足元からドンドンと言う音が響いた。浦原は、畳を退かそうとするとドドーンと畳は浦原の顔面にクリーンヒット！！

「ルキア！！」

「うう、い、痛いつすよ！阿散井さん！！」

「あ！す、すんません。浦原さん…て、そんな事言ってる場合じゃねえ！大変だ！ルキア！」

「どうしたのだ恋次？」

「ルキア落ち着いて聞いてくれ！一護が！一護が、えーい！落ちつくのは、貴様の方だ！」

「すまん！…一護が処刑される事が分かった。」

「「何なに(で)！」」

「そんな！」

「どうして！黒崎君が…！！」

ガタン！

奥から物音がして、急いで戸を開ければ、遊子と夏梨が先程の話を聴いていたのか床に座り込んでしまった。

「遊子ちゃん！！」

慌てて織姫が駆け寄り、遊子に問い掛ける。夏梨もその場に立ったまま動かない。

「もしかして…今の話を聞いちゃったんだよね。」

遊子と夏梨は、頷き顔が真っ青になっている。

「…仕方ありませんね…朽木さん。今直ぐ尸魂界に戻って情報収集してもらえませんかねえ？」

「ちよつと待った！！」

「なんだい？阿散井君？」

「情報収集なんだが、出来そうも無い。」

「何故だい？阿散井君。」

「それが、多分俺とルキア意外の隊長、副隊長は全員一護とお前達の記憶を失ってる可能性が有る。」

「なんじゃと！！それは誠か恋次！！」

「ム！」

「隊長達や副隊長が可笑しいんだ、丸で一護の事綺麗さっぱり忘れてる見たいでさ。」

夜一は、黄色い目を細め、浦原と石田は鋭い眼光になる。ルキアは驚き、井上と遊子、夏梨は立ち尽くしている状態。

「分かりました。ては、朽木さんに阿散井さん、一端尸魂界に戻って状況を確認して下さい。皆さんも思うところはありますが、今日の所はもう遅いので、お引き取り下さい。」

そして、各々解散となった。

驚愕（前書き）

うん。サブタイトルが…超微妙です。

驚愕

四十六室との会議も終わり、黒崎一護は、一旦四十六室に身柄を移した。

そのまま引き取り、四番隊救護詰所まで運び看護したかったがそれは出来なかった。

そして、数時間後部屋の中で一護は、腕に無数の点滴をして、顔は青白く汗が吹き出た状態で俯けに寝かされていた。

「では、頼みましたよ。卯ノ花隊長。」

「はい。体調と意識が回復次第ご連絡差し上げます。」

山本元柳斎重國は、病室を出て行った後、

卯ノ花は黒崎一護を見て、

「…もうそろそろ宜しいのでは有りませんか？改造魂魄。いいえ、コンさん、と及びした方が宜しいではありませんか。」

「！！！！」

「出てきても大丈夫。私と総隊長は、ご存知です。誰も此処へは簡単に入って来れませんので。」

渋々コンは、一護の懐から勿論ライオンのぬいぐるみの格好で出てきた。

「どうして分かったんだ？俺が一護の懐に入ってる事を。」

「私は黒崎さんに触れて居るのですよ。分からない訳が有りませんが総隊長は、黒崎さんを見た時点ですでに分かっていらつしやう。見た見たいですが。」

「……。」

「…浦原喜助ですね。その様な事が出来るのは。彼しか思い浮かびません。ですが、流石浦原喜助と言っておきましょう。黒崎さんに掛けられた術も体へのダメージを軽減させたお陰でそれ以上の悪化を押し得られたのですから。」

「…ですが、流石に、此れは…無理ですね。」

卯ノ花は辛い顔で、一護の顔にタオルを充てる。意識は無いが、額から汗が吹き出て止まらない。彼が意識を回復したならば、必ず耐えられず暴れてしまう。

「でも、…なあ、話しは聴いちまったけど、どうにもならないのか？一護は気絶してて良かったんだが。絶対一護可哀想過ぎる。何で、何で一護ばかり…こ、これじゃ…」

「…私達も最前を尽くします。貴方は、黒崎さんが目覚めるのを見守って下さい。黒崎さんが目覚めましたらまず状況の確認と心を落ち着かせる事です。今の私達には、それしか出来ませんから。何か

合ったら此処にベルがあります。私達を呼んでください。」
「でも、俺人形だぜ！」

「大丈夫。貴方には山田花太郎を此方に呼んで置きますから安心して頼って下さい。」

浦原商店に居た、ルキア、恋次、石田、茶渡達は各々帰っていった。

「おーい！遊子！夏梨！浦原呼んで来いって言ったただろが。……
どうした？」

「あ！お、おじ様！た、大変な事に……！」

慌てて一心の元に駆け寄り井上が先程の話した。遊子と夏梨は戸惑い、何故兄がそんな事になって要るのが分からなかった。

「……分かった。そう言ったんだな。……暫く様子を伺うしかない……か。」

一心は浦原を見て、目で合図しながら。

「遊子、夏梨。今日は遅いから浦原の所で暫く泊まっていきなさい。」

二人は頷き、浦原は、ジン太とウルルを呼び二人を別の部屋に案内させた。そのあと一心は、織姫ちゃんに、

「織姫ちゃん悪いけど暫く家の娘を宜しく頼むわ。」

「はい。任せて下さい。」

織姫は、「任せて下さい」と言ったが、他人には余り解らない用な
悲しい顔で答えた。

そして、織姫は頷き二人の元へ行った。

寢覚め

翌朝、遊子と夏梨は今日色々有りすぎて寝られず、織姫に質問を投げ掛けていた。

自分達は今日死んでしまった事や兄や父親が死神で、私達の知らない所で虚と戦いながら、私達の事を見守ってくれていた事、まあ、夏梨はその状況をわかっていたが。

兄が尸魂界と言う所に捕まって処刑去れそうになっている事など色々織姫と話した。

そのお陰で今の自分の置かれた状況を再確認出来た。

「…姉姉。私、私ね！一兄を助けに行こうと思うんだ！」

「え！」

「私も！お兄ちゃんを助けに行きたい。」

織姫は、夏梨と遊子の言葉に驚いた。

「だって一兄何もやってないのに処刑って…、彼方には、冬獅郎と乱菊さんが居るけど一兄の事忘れてるかも知れないんでしょう？だったら私達が行くしかないじゃん。」

「それは、…」

「それなら、助けに行きますか？」

三人で会話して聴いていた所を、後ろの襖から声が掛かったのは、

浦原喜助である。

「失礼しますよ〜ん。」

「「「浦原さん、おじさん、おっさん」「」」

「先程朽木さんから連絡が有りましてね。隊長、副隊長達が一護さん達に関する記憶がないと言うことが判明しました。」

三人は動揺を隠しきれない。

「そ、それじゃ、お兄ちゃんどうなっちゃうの?」

「まあ、このままほったらかしにすれば間違いなく処刑は免れませんでしょ〜ねえ。」

「「「!?!?!」」」

「

「なら私と遊子で、一兄助けに行く!!それに、向こうには、冬獅郎がいる。一発殴らないと気がすまないよ。」

織姫は、驚いた。冬獅郎さんと乱菊さん達は家に来て寝泊まりして知ってるけど、夏梨ちゃんとは面識がなかったハズだと。

「夏梨ちゃん、もしかして…冬獅郎くん知ってるの?」

「うん。知ってる。前にサッカーの助っ人でね。後、化け物に襲われそうになったときに助けてくれたり家に来てくれたりね。」

「そう…だったんだ。でも、助けに行くって言っても…」

織姫は、暫し考えてから浦原を見たが。浦原は首を横に振る。

「まあ、この話しは明日、と言うことにしませんか？

今日は色々有りましたからねお疲れでしょう。」

浦原は、此処で話を切り時計を見ると2時を疾つくに過ぎていたので寝る用に促した。

「井上さんもお疲れでしょ。此処で寝ないと明日、体力持ちませんよ。」

「はい。今日は、遊子ちゃんと夏梨ちゃんと同じ部屋で寝ようと思います。」

「そうですね。では、お休みなさい。」

翌朝、織姫は、気持ち良さそうに左右に寝ている遊子ちゃんと夏梨ちゃんを起こさない用に布団から出て起きた。

「おはようございます。テッサイさん。」

「おはようございます。織姫殿。やはり早いすな。昨日は良く寝られましたかな？」

「はい。でも、私より遊子ちゃんと夏梨ちゃんの方が疲れていたのか先に寝てしまったようです。」

「そうですね。そうですね昨日、店長から井上殿にお渡しするように此れを預かって降ります。」

テッサイは、織姫にブレスレットを手渡した。

ブレスレットはリング形のピンクの花柄模様の入ったシンプルなデザインだった。織姫は、早速ブレスレットを付けた。

暫くして、

「起つきろー！お前達ー！！朝だぞ朝ー！！」

「朝です。起きて下さいーい。」

起こしに来たのは、ジン太とウルルだが、大声を出しても起きる気配がない。ジン太は、遊子の体に触れたとたん風を切る用に手が弾かれた。

「ウルルー！！店長呼んでこいー！！急げー！！」

ウルルは、急いで浦原の元に駆け出し寝ていた浦原を起こしに行った。

「おい！目を覚ませよー！！」

「ジン太殿！何を騒いでおいでで？…！！」

「お二人は、昨日な事が有ります。もう少し寝かせて上げて下さい。これから、お二方は大変苦勞なさるのですから。」

「えー。」

「ジン太くん。喜助さんが大丈夫だって、だから寝かせてあげなさい。だって。」

「そうか。」

騒いでいる内に、二人は起き出した。頭がボーとしているのかはつきりしない。

「おや、起こしてしまいましたね。遊子殿、夏梨殿。」

「おはようございます。テッサイさん、ジン太くんウルルちゃん。」

「はよ。テッサイさん、と、ジン太、ウルル。」

「早速ですが、体の調子は如何ですか？」

「「?。」」

「体に異常は有るか?あと、お腹空いてるかって事だよ。」

「全然お腹空かないよ。」

「そう言えば…お腹空かないかも…。」

「そうですが。」

後ろから、浦原と肩に乗った（猫）夜一様と織姫が来た。

「おはようございます。遊子さん夏梨さん。」

「「おじさん。おっさん」」

浦原が、複雑な顔で二人を見る。

「もう、そろそろ…おじさん、とか、おっさんは…止めて戴きたいッスね。」

「えー！だってー胡散臭いんだもん。どっからどう見てもオッサンじゃん。」

後ろで、ジン太とウルルがクスクスと笑うなか、テッサイが二人に拳骨を喰らわせていた。

「はあ、それじゃー地下勉強部屋に移動しましょうかねえ。」

「「地下勉強部屋？」」

「何処かに連れて行くの？」

「まあ、行けば分かります。」

「「「？？」」」

浅打

二人は、浦原に連れられて地下勉強部屋に来た。

「はい！注目！此処は、二人の為にオーバーテクノロジーの粋を集めて結集させ一晩で作り上げた地下勉強部屋だ。グハ！」

最後まで言い切る前に（猫）夜一が猫パンチとキックで遮った。

「ひ、酷いじゃないですか、夜一さん。」

「お前がふざけ過ぎだからじゃろつが。」

「さつさと遣ること遣らんか！馬鹿者！」

普通は、地下勉強部屋に付くなり、この空間にビックリするハズ…の遊子は少しズレている為なのか。

「キヤー！！猫が喋ってる！！？」

「……………？」「……………」

遊子は、透かさず夜一を抱き上げ、名前は、何で喋ってるのとか、私達の言葉が分かるのとか色々聞いて自分の世界に嵌まってしまった。

「まてまて、落ち着け！遊子。先ず儂を下ろせ。儂を下ろせば質問に答えてやる。」

遊子は、仕方なく夜一を下ろして、遊子の質問を一つ一つ答えた。

「そ、それじゃ宜しいでしょうかねえ。」

皆が浦原に注目する。

「まず、遊子さん、夏梨さん。お二人には、これから死神になつてもらいます。」

「「死神?」」

「だって、私達此処に居ちゃいけないじゃ。」

「おや?一心さんから聴いて無いんですか?二人は既に死神の素質は充分にあります。だから、死神にさせると。」

遊子は、死神に付いて良く分からなかったが、夏梨は、目をキラキラさせていた。

「それって、一兄見たく慣れるの?」

「はい。ですが、自分自身の死神の力を見つけて下さいね。出ないと、一生死神に慣れないので、逆に、虚になりかねませんからね。」

「虚って、それって…襲われた時見たいな変な仮面の化物になつちゃうって事?」

「「」名答。まあ、死神に成らないと、あなた方のお兄さんを助け出

せないと思えますよ。：後、自分自身の身を守る事何て出来ませんからねえ。」

浦原は、ニコニコしながら答えるが、最後の言葉は、二人には、分からない用に小声と一瞬表情を隠しながら言った。

肩に乗っている夜一にしか分からない用に。

この話を見ていた織姫は、複雑な表情で見ている。

「遊子ちゃん、夏梨ちゃん頑張って死神になってね。私、応援するね。」

悲しい顔をするが、織姫は、にこやかに微笑む。それを悟られない用に、二人を包み両手イッパイに抱き締める。

「うん。私頑張って死神になる。一兄に、散々護られたんだ。今度は、私達が、一兄を護る。」

「うん。私も、死神になってお兄ちゃんを助ける。」

それは、遊子と夏梨から覚悟と信念が伝わって来た。

では、始めましょうかねえ。と言いながらジン太とウルル、織姫とテッサイは、地上へ引き上げた。

「それでは、始めましょうか。」

浦原は、遊子と夏梨に刀を渡した。

「刀？此れどうするの？」

「これは、此れから、あなた方を護為の斬魄刀と言います。まあ、まだ名前が聞けていないので、浅打、と呼ぶんですが……」

「斬魄刀？浅打？」

「浅打とは、まだ名前の無い、まだ持ち主の心が直接響いていない刀の事です。斬魄刀とは、持ち主の心が刀に直接響き、名前を聞き出した状態の事です。死神になる第一歩です。その刀は、あなた方を導きそして助けます。大事に扱って上げて下さいね。」

「……………うん。」

「……………はい。」

二人は、頷いた。

そこで、(猫)夜一は、目を細め、叫ぶ。

「何をこそこそ覗き見しておる。見苦しいぞ一心!!」

二人は、辺りを見渡すが、何処にもいない。何を言ってるのか分からず、浦原を見れば、楽しげに二人を見ているだけだった。

すると突然、自分達の頭に重くのし掛かって来た、後ろを振り向けば、

「「親父!!お父さん!!」」

頭の上に手を乗せて、楽しげに笑ってる父親の姿があった。

「何で来たんだよ！髭親父！」

「お父さんどうして来たの？」

二人は、何故、どうして、まるで鬱陶しさ全快で父親を否定している。

「何！遊子〜夏梨〜何で、父さん邪魔者扱いするんだよ。」

「そんなの決まってんじゃん。」

「ウザイから。（もん）」

一心は、懐に仕舞っていた真咲の写真を取り出して、

「真咲〜！遊子と夏梨が、邪魔者扱いするよ。」

等と言って居る中で、二人は、

「こんな所までお母さんの写真を持って来んな！髭親父！」

「そうだよ！人様の所まで恥を曝さないでよ！お父さん！！」

二人の逆鱗に降れたのか容赦ない激を飛ばす娘達。

「真咲〜娘達が父さんをいじめる〜」

「五月蠅い（よ）！！！！」

「まあまあ、遊子さん夏梨さん、其の位にして上げませんか？」

二人供父親には、見向きもしないで浦原を見る。

「自業自得だな。」

「うっさい！黙れ！夜一！！」

夜一は、ゲラゲラ笑う。

「ほら、一心さん娘さん達が心配で此処に来たんでしょ。…で、遣りますか？」

浦原は、オチャラケと言った表情とは一変、鋭い眼光になる。
一心も又オチャラケとは一変、目の色が変わる、が、この二人から遊子と夏梨は、表情を見る事が出来なかった。

そんな二人は、浅打を握り締め、黙って見守る事しか出来ない。
そんな遣り取りを後から見守っている夜一が、

「大丈夫じゃ。そんなに不安にならんでも良いぞ？」

「夜一さん…。」

「お主達は、既に自分の主と対話しておるじやろう。其奴の名を聞き出すのじゃ。簡単な話しじゃ。」

「だって…そんな事言ったって、全然名前が聞こえなかったんだもん。」

「私も夏梨ちゃんと同じで名前が全然聞き取れなかったよ。」

名前が聞き取れない事を不安に思ったのか、夜一に心をぶつける。
一心は、浦原との遣り取りで決意し決めたのか娘達の目の前に立った。

「遊子、夏梨。それは、恐怖、不安、懸念が入り交じった心だ。まずそれを、撥ね除け心を開かせる奏すれば、主は、からなず答えてくれる。」

遊子と夏梨は、どうしたら良いのか分からず立ち尽くす。

一心は、腰にぶら下がっている斬魄刀を掴み…静かに抜く。

「…遊子、夏梨、浅打ちを抜きなさい。」

浅打（後書き）

斬魄刀の説明が自分でも良く分からないで打ってしまったので、間違っていたらすみません。

気後れ

恋次とルキアは、廊下を早足で四番隊へ移動していた。

四十六室から黒崎一護の身柄を預け意識とある程度までの体力の回復させる事で、四番隊救護詰所に一時的に預けられた事を聞いた。

「恋次！一体どう言う事だ！！」

「わかんねえー。何で、こうなったかわかんねえーよ！！」

「私と恋次、現世に行っておる間に何か合ったようだな。」

「そうだな。だけど、俺…！？現世で大量の虚を倒している間に、か…？だけど、アレって…一護の妹達だろ…？」

「何れにしろ、卯ノ花隊長に、一護の面会の許可を求めなければ…。」

「そうだな。まず、話しは其からだ。」

ルキアと恋次は早足で行っていた為、横からお湯と手拭いを持った、四番隊、山田花太郎に築かぶつかってしまった。

「うお！。」

「あああ！……………。ス、スイマセン、スイマセン、ごめんなさい。……………」

ぶつかったのは恋次で、オケと手拭いの入ったのをスパーンと投げた。恋次がさかさずキャッチした。危うく恋次にかける所だった。

「たく、て…花太郎！何やってんだよ。ちゃんと前を見るよ。」

尻餅をついた花太郎を立たせた。怒った表情で花太郎を見た。

「あ、すいません。」

「しかし、何をやっておるのだ？この手拭いとお湯は？」

ルキアは、恋次が持っているオケを見て疑問を投げ掛ける。

「あ、それは、卯ノ花隊長から黒崎一護さんと言う方の看護を任せられたので、それを持って病室に行く所だったんですよ。」

「何！一護の！」

「おい。チョットまで…花太郎…お前…まさか？」

「はい？」

「一護の事…忘れてる訳じゃねえよな？」

「黒崎一護さんですか？あれ？会ったことありましたっけ？でも、あの方は、大罪を犯して四十六室に捕まったのではないんですか？ある程度まで回復させたら懺罪宮に運ばれる見たいですよ。」

「な！！花太郎！！本気で言っておるのかお主は！？」

恋次は、花太郎に掴み掛かろうとしたが、後ろから柔らかな声が掛かった。

「何をなさって居るのですか。山田花太郎。」

「卯ノ花隊長！」

振り向けば、卯ノ花隊長がやって来た。

「阿散井副隊長、朽木副隊長。少々お話が有ります。此処では監視の目が有りますので私の自室へ来て頂けませんか？」

卯ノ花の有無を言わせぬ優しい言葉を投げ掛けるも二人は、頷くしかなかった。

「「はい。」」

「山田花太郎、貴方は、黒崎一護さんの看護をしっかりとお願いしますね。」

「は、はい！」

ルキアと恋次は、卯ノ花隊長に付いて行く事になった。

現世空座町

井上、石田、茶渡、たつき、浅野、水色、は公園で話し合っていた。

「織姫、遊子ちゃんと夏梨ちゃんは結局どうなったの？」

「浦原さんと一心さんの話しに寄れば二人を死神にするんだって。

…やっぱり、因果の鎖が切れてしまつて魂魄が元に戻らないらしいの…それと、黒崎君見たいに力が強すぎて周囲に影響して虚を呼んでしまうからって言つてた。お、おじ様は…前から娘達を守る為に色々準備をしてんだけど…それでも虚を呼んでしまつらしくて…だから今、浦原さんの所で修行中なんだよ…。」

たつき、浅野、水色は、複雑な顔をした。よりによって、黒崎家全員が、死神！になつてしまつとは…。

あの戦いから一護を容赦なく苦しめ、更に追い討ちをかけるように一護自身にも…。

一護は、それに耐え皆の力を得て乗り越えて来た。

それを、また更に一護の妹達が狙われる。

どれだけ一護を苦しめれば気がすむのか…。

だから今度は、私達が一護を、妹達を、私達が少しでも心の支えになるように…

上空からフード付きの黒いマントを身にまとったのが一人。

「……ふう。奴らバカじゃないか？ 奴が行き着く先は既に決定しているのに……それを止めるなど……逃れられないし無理だ。四十六室も馬鹿だな。……！！」

黒いフードを被った男は顔に笑みを浮かべながら公園に集まっている奴らを見下す。

「！」

石田が、何かに築き上を見上げる。

「どうした？ 石田！」

「いや。気のせいか？ 一瞬誰かに見られていた用な感覚がした。……が、やはり……気のせいか？」

「ム……。」

「うーん？ そうかな？ 気のせいじゃないかな？」

「それなら良いけど……（だが、何処かで……考えていてもしょうがない……だが、警戒しておいて損はないな。）」「」

「ふう。危ない危ない。そうだった…アイツは確か、周囲の変化には敏感だったんだ。」

言葉を発した直後その男は音もなく姿を消した。

見守る

ドドーン!!

「キヤーー!!」「っ!!」

地面に大きな穴が空く程の威力。今の遊子と夏梨では避けるのが精一杯。

先程から一心の攻撃で、しかも魂魄の状態では俊敏に動かせる訳もなく、一心が、攻撃しては避けまた攻撃すれば避けの繰り返しであった。

「はあはあ…こ!この髭親父!!遊子を殺すきか!!」

そう言いながら、背後から上段構えで夏梨は何の躊躇なく一気に振り落とす。

「お!やっと攻撃してきたな!!」

透かさず斬魄刀で軽く受け止めてやる。

「嘗めんな!!遊子!!」

「たあー!!」

遊子もまた夏梨と同じ用に背後から一心に向けて刀を振り降ろすが、そこには既に一心はいない。

その代わりに…

「きゃー!」「うわー!」

遊子と夏梨が、刀を交差する形になってしまった。

その様子を遠くから陽気に浦原と(猫)夜一は、この戦いを観戦していた。

浦原は、お茶を啜り、(猫)夜一は、m i l kを嘗めて寛いでいた。

「いやー。一心さんが、まさか遣ってくれる、何て思ってもいませんでしたよ。夜一さん。」

扇子をパタパタと扇ぐ浦原。

「儂も驚いた!まさか、あ奴自ら斬魄刀を抜くとはの〜!」

夜一もまたm i l kを飲んで上機嫌。

「でも、良かったじゃないツスカ。娘さん達の魂魄が慣れてきて。」

「そうじゃの〜」

「一心さんも少しづつ力を強め始めていますし…もうそろそろではないでしょうかねえ〜」

遠くの方では、岩が砕ける音と遊子と夏梨の悲鳴と文句の用な叫び声の木霊する。

「嘗めないでよ！お父さん！！わ、私だって、私だって……や、遣るときはやるんだからー！！」

「絶対一発殴つてやるゝ髭親父！！！！！！」

ドドーンー！

「ひい！！！！」

暫くして、二人の足がピタリと止まった。

遊子は、もう動けないとばかりに四つん這いになり、夏梨は、立っ
ていながらも浅打を握り締め、ふらふらの状態だった。

「はあはあ……。」

「はあはあ……はあはあ。」

一心は、日常生活では、遊子と夏梨を甘やかしたり、からかったりしてはいるが、今回は心を鬼にして、娘達と向き合わなければなら
ない。もしこのまま魂魄のままだったら虚になりかねない。

だから……

「遊子、夏梨、休んでいる暇は無いぞ！」

「チヨット待つてよ髭。少し休ん…！うぁ！」

「お父さん少し…きゃー！」

夏梨が休んでからでも、と言い切る前に一心が攻撃してきた。慌てて夏梨は横に飛び退き、遊子は転がりながら何か避けた。

そして一心は、少し低い声で…

「遊子、夏梨、生温い事言っでないでもう暫く続けるぞ！今度は…
…本気で行く。」

遊子と夏梨は、父親の顔を見た。その顔は、今まで患者や重症追った人達を助けた時や自分達が良く知っている父親の顔では無かった。

これが死神、黒崎一心としての本来の顔なのだ、と思わずには居られない。

この時二人は、背中に寒気が走った。

「遊子…立て。」

遊子は、何とか立ち上がろうとするが、足に力が入らずよろけてしまい、隣に居る夏梨が補助して立ち上がらせる。

「二人とも構えろ。…いいか、俺の言葉を聞き間違えるなよ。恐れるな。どんな事があっても前を向け！けして後ろを振り向くな！今

お前達の中に在るのは恐怖だ！それが有る限り己の中に眠ってる斬魄刀の名など聞くことが出来ない。」

遊子と夏梨は、自分の刀を見るが、刀は一向に呼び掛けては来ない。夢の中に居た時は、散々会話をしたのに、何の反応もない。

虚に襲われた時は、自分の中から声がして来て、私達を助けてくれたのに…。

それどころか、先程の攻撃が…父親が本気で打って来たら只では済まないかも知れない恐怖が二人を襲う。

「ボーと、突っ立ってないで！構えを崩すな！」

二人は、刀を構えて直ぐに、一心が目の前に現れ二人を斜め下から刀をあて吹き飛ばした。

「うう……………痛い」

「ぐ……………うあー」

遊子は、涙を浮かべながら刀が握り締めているが稍震えが見え目が何処を見ているのか分からない。

夏梨も刀の刃先がひび割れているが、刀を確りと握り締めている。だが、少し様子が可笑しい。

一心は、その動きを見逃さず見つめる。

見守る（後書き）

最初、浦原さんに二人を鍛えさせて死神にさせようと思いましたが、他の作品を見ていると、浦原さんが鍛えて要るケースが多かったの
で、敢えて父・一心に二人を鍛えさせて見ました。

信頼

遊子は、いつの間にか夢の世界へ来ていた。

空を見上げれば、少し薄暗く月が、オレンジ色に輝いていて、その光を浴びて水晶が輝く。この前見たときは、風景がハッキリとじていてとても清々しい。

さっきまで父親と向き合って戦っていたなんて思えない程静かで心地好い。

「あ！そうだった。斬魄刀の名前、あの人から聞き出さなきゃ！！」

遊子は、周りを見渡すが何処にもいない。その人呼び掛けて見たが返事は帰って来ない。

精神世界で、ただ一人何も出来ずただじっと立っただけだった。

夏梨も同じ事で、空は薄暗く月は蒼く輝き、周りの水晶に照らされて神秘的な光景だ。

だが、考える。

自分は、刀を振り回して親父に吹き飛ばされた所で記憶が途切れる事に…。

遊子と夏梨は自分達の世界に来ているのに目的の人物に会えない。暫くすると頭に何かが直接聞こえて来たと同時に…ガラスが割れた音が木霊した。

水晶が一斉に砕け散ったのだ。砕けた水晶は、散らばったまま停止

し、周りを見渡せば、一際目立った水晶が砕けずにあった。
遊子と夏梨は、水晶の前に立った。

「嘘？遊子？」

「え？夏梨ちゃん？」

お互い水晶から写し出される姿にビックリした。

遊子の目の前には夏梨が…夏梨の目の前には遊子が水晶を透して写
って居たのだから驚きだ。

そして、自分達の頭に直接聞こえて来た。

現実世界

遊子と夏梨は、刀を構えたまま動かず、この光景は、約3時間たっ
たまま動かないで要る。

一心は、目を瞑り自身の斬魄刀を納め、娘達の目の前で、腕を組ん
でじっと立ったまま仁王立ちしている。

が、…そんな中……

「夜一さん、大丈夫ツスカ？酔っぱらって寝ちゃわないで下さいねえ。」

夜一は、m i l kを飲んだせいなのか、陽気？やら陰気？…に座布団で……

「うーい！…ひいっ！喜助！つまらん！遊子と夏梨は、死神にならんぞー！？」

「夜一さん！！酔っぱらい過ぎですよ！！大丈夫ツスカ？もうそろそろ前兆が見えて来るハズです。気長に待ちましょう。」

浦原は、自身の湯飲みが空になってしまった事で…

「テツサイ！お茶お願いしますね！後、おせんべいと甘いものもお願いしますよ。」

「僕はm i l kじゃ！…はよー持ってこんかテツサイ！ヒク！」

一心は、目を瞑り精神を集中していたにも拘わらず、遠くの方から聞こえてくる会話の内容に、イライラし出して来たのか………

「てめえら〜！さつきからつるせえぞ〜！少しは大人しく見ていらねえのか〜！！！！」

浦原と夜一は、一心の叫び声を軽くあしらう……………

「一心さん、頑張ってくださいね〜。」

一心さんに扇を目一杯降りながらアピールする浦原。

「はよー娘達を死神にしてやらんか〜うい〜！！遅いぞ〜！んう〜」

「夜一さん！milkはやめましょうよ〜。酔いざましにお水を……………
テッサイ、お水もお願いしますね〜！！」

暫くして…………上からテッサイが、…………降ってきた！！

「お待たせ致しました。お茶とおせんべい、甘いものには、和菓子！夜一殿には、milk！そして、酔いざましには、お水で御座いますぞ〜！！」

テッサイは、全ての物を落とさずに着地をした。

「一心殿〜、娘さん達が死神に慣れたら食事に致しましたしよ〜。」

今日は、腕に寄を掛けました故美味しいですぞ〜！！」
超上機嫌で話すテッサイ。

浦原と夜一は、食事の事で頭がイッパイらしく盛り上がってしまったている。

「……………はあ。」
再び精神世界…

「さあ！刀を掴んで遊子！！私の名は、……………です。」

「行こう！花梨！私の名は、……………だ！」

それぞれ聞こえてくる言葉なのに、肝心の名が聞き取れない。だが、水晶の真ん中には、それぞれ左右対称に刀の柄が剥き出しに自分の方に向いている。

刀の柄は、遊子がオレンジ色の柄で、夏梨は、青色の柄だ。

遊子と夏梨は柄を握り締め思いつきり引つ張る。

すると刀は見事抜け、二人の会話が、木霊する。

「次に、再会するときは、私の名が届くと良いわね。遊子。」

「次こそは、私の名を聞けると良いな。待っているぞ夏梨。」

二人の会話を聞いたとたんに、現実世界に戻って行った。

死神

一心は、閉じていた目を静かに開けた。遊子と夏梨から波動が伝わって来る。

遊子の体からオレンジ色の光が、夏梨の体から青色の光がそれぞれ輝いた。

輝きは、更に強くなり爆風となって周りの岩を吹き飛ばした。

煙りから出て来た二人は、正しく斬魄刀を構え死覇装に身を包んだ姿だった。

夏梨と遊子は、静かに目を開け、今、自分達の置かれた状況を理解出来ずにいた。

「……………」

一心は、笑いもせずに二人を見つめる。すると、後ろから浦原とが現れ、

「いやあ〜おめでとつございます〜。これで晴れて死神になれましたねえ〜！」

「ヒク！ゆず〜かりん〜よくやったぞ〜っい〜…スウスウ…スウ…。」

「あらら、夜一さん寝ちゃいましたねえ。」

浦原の肩で夜一は、遊子と夏梨に祝福の言葉を掛けたとたんに、寝てしまった。

「それじゃ～皆さん此処は一旦区切りましようかねえ。地上は、既に夜ですよ。」

遊子と夏梨は、立ったまま刀を構えながら動かずにいた。

「私達、死神に慣れたんだよね。」

「うん。だって…髭親父や一兄と同じで、黒い着物着てるから死神に慣れたんだよ！！それに…ホラ！柄の色が変わってるし…あと、刀が自分にあつた身の丈の長さになってるよ。」

夏梨は、浦原から刀を貰った時、自分には少し大きすぎるのではないかと思えたが、死神になったと同時に刀のサイズが変化したのだと理解した。

遊子は、此処で漸く死神に慣れたのだと実感した。

とたんに、全身の力が入らなくなり、へなへなと地べたに座り込んでしまった。

「チョット！遊子！座り込まないでよ！」

「…夏梨ちゃん！ごめん…力が入らないよ！」

「もー！梯子上がるのどうするんだよ！！」

皆は、地上へ引き上げてしまった為遊子と夏梨しか居ない。

夏梨は、必至に遊子を立たせようと努力するが今の遊子に力が入らない為無理だった。

遊子を背負って行ける程今の自分に体力が余り残ってない。

「置いていくからね。何だか、お腹空いちちゃったよ〜あんまし力が入らないし私も何時倒れるか分かんない。」

「私だっってお腹空いちちゃって力が入らないよ。」

そそくさと夏梨は、地上に上がる為、梯子の方へ行ってしまった。

「待つてよ〜！夏梨ちゃん」

だが、夏梨もまた、梯子に登った途中で…体力の限界が近づいしまい、梯子から手を放してしまった…。

「ゲーヤバい！」

放して仕舞えば後の祭り。一直線で、真つ逆さま。

夏梨は、思わず目を瞑った…が、いくら待っても衝撃は来ない…その変わり…。

目を開ければ、

「親父！」

「何やってる。梯子を手から放すな。」

「だって、離れちゃったんだもん…。」

ムスーとした顔で答える娘。一心は、夏梨を抱えたまま一瞬で遊子の所へ行った。

「…!!！」

自分の来た長い道のりを一瞬にして逆戻りするはめになった。

「お父さん!!！」

一心は、夏梨を降ろし座らせ二人の頭に手を乗せる。

「よく頑張ったな。」

そこには、死神、黒崎一心としてではなく。二人の父、黒崎一心としての何時もの顔があった。

二人は、顔を見たとたんに、遊子は、泣き出し、夏梨は、絶対泣かない用に必至に堪えるが…。

一心は、笑みを浮かべ…

「…夏梨。」

頭をぐしゃぐしゃと乱暴に振ってやる。

「ちょ！なにするんだよ。髭親父！！」

夏梨は、涙目になりながらも、心の中で親父に感謝した。

「ホレ！上でテッサイが飯作って待ってる。二人の為に腕に寄を掛けたんだと、行くぞ！」

「え？行ってくたて…うお！」

「え？」

「掴まってるよ。」

遊子と夏梨を両手で抱え、遊子と夏梨の腕を自分の首に回させ地面を強く蹴った。

空をゆっくり飛び飛んでる中で、

「お父さん。…私、お兄ちゃん助け出せるかな？」

「私も、…一兄助けられるかな？」

「何言ってるんだ。助けるに決まってる。何でそこで「かな？」何だよ！？」

「……………」

「…だが、まず死神には慣れた。ひとまず第一段階は、終了だ。第二段階は、精神世界から自身の斬魄刀の名を聞き出す事に今は集中だ。分かったか？」

「うん。」

「頑張り二人とも自分に負けるな。……よし、スピードを上げるぞ掴まってるよ。」

「うお（きゃ！）最高！！！！！」

記憶

「ぐうう……っ」

「おう！一護！目が覚めたか！」

聴て完全に覚醒した一護は、辺りを見渡しながら何時もと違う壁と天井の風景に戸惑った。

「え？あれ？…こ、こは…？…ぐっ！！」

一護は、目覚めたとたんに背中に激痛が走るのか、顔をしかめた。

「一護！！大丈夫かー？テメーが一生目覚めないんじゃないかと思つてヒヤヒヤしたぜ。」

一護は、なぜコンが此処に居るのか？此処は尸魂界ではなかったのか？俺は何者かの手に寄つて捕まったのではなかったか？俺は部屋に閉じ込められていたのではないか？

一護は状況が分からず困惑した。

「…い！おい！一護、何ボーとしてるんだよ！」

「え？」

「え？じゃねえだろ。何か欲しい物が有るんじゃないのか？」

「…み、水が欲しい。」

思わず腕を動かせば何か左腕に結わかんのような感覚して左腕を動かして見た。腕に刺さっていたのは点滴で、体を起こそうと力を入れ起き上がるが、途中で力尽きてベットに逆戻りし、背中に激痛が走った。

「ぐう！！」

「一護。ホラ、水だ！飲め！」

コンは、隣に用意してあった水差しを一護の口の元に持っていき飲ませた。

その時、ドアから入ってきた人物にビックリした。

「目が覚めましたか？黒崎さん！！」

部屋に入ってきたのは、花太郎で、手に持っていたのは、薬と手拭い、それと包帯を持って入ってきた。

「花太郎…？」

だが、一護は、花太郎に会ったとたん結わかんの用な物を感じコンを見たが…。コンは、一護が何かを感じ取った理由がわかったねか一護を見て首を横に振る。

コンは、一護に向かって小声で、

「一護。疑問に思うかも知れねえが、花太郎がこの部屋を出て行った後でちゃんと話をしてやる。だから…今は、黙って温和しくしててくれ。」

一護は、コンが真剣に話す姿を見て温和しくする事にした。

「黒崎さん。背中に巻いてある包帯を取り替えましょうか。」

一護は、背中の焼けるような痛みと激痛が来るのは何なんだろうと思っていた所をコンが、それも含めて話してやる。だから待ってろ、と言っ。

何時なら普通に接してくれるはずの花太郎が接してくれない。まずは花太郎とコンの態度に疑問を思ったのか眉間の皺を寄せながら花太郎は、テキパキと包帯を取る替えていく。

「花太郎！終わったかー。」

「はい。コンさん。」

「なら、早く出て行ってくれ。」

「え?!」

「え!じゃねえよ。早く出て行けって行ってるんだよ。それと、早くオレの女神様!…じゃなかった!お前らの隊長呼んで来いよ。」

「コンさん。酷いですよー。」

「酷いもクソもあるかー！！なら、此処に居るのは誰だ。」

コンは、起き上がれないベットに寝て居る人物に指を指す。

「え？この方は、黒崎一護さんですよね？」

花太郎は、頭を抱えながら答える。

「そうじゃねえだろ。良く見るよ。一護だろ。一護。」

「だから、黒崎一護さんですよね。」

「もうお前は出てけ。早く隊長を呼んで来い。」

「……わ、分かりました。呼んできます。」

花太郎は、卯ノ花隊長を呼びに行く為、その部屋を出ていった。

暫くして、卯ノ花隊長に報告し廊下を歩いて居ると。

「花太郎ー！！」

裏から聞こえて来たのは、ルキアと恋次だった。

「あ！ルキアさん、恋次さん。」

「一護の容態はどうだ？意識が戻ったのか？」

「はい、先程意識が戻って包帯を照り替えて来たばかりです。」

「本当か！一護の野郎が目覚めたか！！」

花太郎は、不思議に思った。何で一護の事を丸で自分の事の用に喜ぶのか。

「あの、恋次さん…ぼ、僕は…黒崎さん。に会ったことが在るんでしょうか…。」

「てめえは、何度も一護と会ってるし一護を助けてる。つか、逆に助けられてるじゃねえか俺達！！頼むから…一護の事でキレイさっぱり忘れるんじゃねえよ。」

恋次は、花太郎の肩を掴みながら必死に堪える。ルキアもまた同じ用に花太郎を見て必死に何かを堪える用に。

「花太郎…済まぬが一護の事を頼むぞ！！」

「は…はい…。」

花太郎は、戸惑いながら頷いた。そして、自分は何故黒崎さんの事について知らないのか？だが、自分の中で、確かに会った事が在るのではないかと疑問に思う事が多々ある。だが、それも…黒崎さんに接触する事に寄って何かに阻害されている感覚になる。

「考えても仕方ないか。取り敢えず黒崎さんの看護を卯ノ花隊長に任せられたんだ。しつかり遣らなくちゃ。」

浦原商店では、

「おはようございます。遊子さん、夏梨さん。」

「おはよう。遊子ちゃん、夏梨ちゃん」

「おはようございます。浦原さん、織姫さん。」

「おはようございます。オッサン、姉姉。」

浦原は、遊子にはおじさんから浦原に変わったのは劇的な変化にビックリしたが。夏梨にまだオッサン呼ばわりされるのが納得いかないらしく…軽いショックを受けている。

「夏梨さん。その、チョット…オッサン呼ばわりするのは、止めて頂きたいッスね。」

「何？ショック受けてるの？」

「これでもアタシは、メチャ若いんですよえ〜。」
と、言いながら扇をパタパタと扇ぐ。

「ええー！だって胡散臭いし、どっからどう見ても怪しいオッサンしか見えないよー。…あ！それとね、死神って、私達より何十倍も長く生きてるんでしょう！やっぱオッサンじゃん。」

「か、夏梨ちゃん！！」

「夏梨ちゃん…何気に酷くない…。」

慌て織姫とが止めるが…何処に居たのか？音もなく（猫）夜一が現れ。

「喜助。諦めろ。お前はどっからどう見てもオッサンじゃよ。」

「ひ、酷いじゃないツスカ！夜一さん！」

夜一は、そんな喜助の叫びを鼻で笑うかの用に、

「遊子、夏梨。食事が終わったら一回自宅に戻れ。」

「え？戻って良いの？」

「えーだって、斬魄刀の名前聞かないと、一兄助けに行けないんでしょー！」

確かに、斬魄刀の名は大切だし兄を助けに行きたいのは分かる…じやが…お主ら学校は行かなきゃならんじやろ。」

「「え！？」」

「え、じゃない。お主らはまだ現世では、生きている事になっておる。」

遊子と夏梨は、目を丸くする。

「だって、私達死んだんじゃないの？」

「自分の肉体に入ったけど弾かれちゃったし…見える人は一部の人間だけでしょ！」

「…はあ、お主らの父親は何も言っておらんのか？まあ良い。まず先にお主らは、食事をして来い。話しはそれからじゃ。」

遊子と夏梨は、夜一の言葉に従いテッサイの所に行き食事を済ませた。

暫くすると、ジン太が遊子と夏梨を呼びにきた。

「おーい！二人とも食べ終わったか？店長が呼んでるぜー！」

「わかった！直ぐ行く！」

「うん。わかった。」

遊子と夏梨は、食器をかたづけをする為に立ち上がったがテッサイが、

「食器は、そのまま結構ですぞ！ささ、早く店長のもとへ行つて下さい。」

「はい。ご馳走様です。テッサイさん。」

「ご馳走様でした。」

遊子と夏梨は、浦原が待つ部屋の前まで来た。

「入るよ。浦原さん。」

「はいはい。どうぞ入って下さいな。」

そこには、浦原と夜一、井上、そして目の前には、大きな布を被せた物体があった。

「…浦原さん…何これ？」

夏梨は、目の前に置かれてる物体を指をさす。遊子も、不思議な目で見る。

「ふふふ、何だと思えますか？」

浦原は、笑みを浮かべながら扇で口元を隠す。不意に遊子が、

「もしかして、私達の体…？」

浦原は、扇をパチンと閉じ。

「…名答ッス…！」

浦原は、目の前に覆い被せていた布を一気に取った。

「さ、自分達の体とご対面〜！！どうツスカ？久しぶりの自分の体を見るのは？」

「……………」

「

（猫）夜一は、笑みを浮かべながら二人の悩んでいる事がわかったのか。

「心配無用じゃ。今度は、弾かれる事もない。安心して入って構わんぞ。」

「まあ、見ているより入ってもらった方が良いツスね〜。」

遊子と夏梨は、自分の体を持って、目を瞑りながら恐る恐る体に入った。

「どうツスカ？元に戻った感想は？」

「…うん。…元に戻ったんだね。私達。」

「すごい。前、弾かれて入れなかったのに…」

二人は、段々緊張が解れて来たのか笑顔になった。

「良かったね。遊子ちゃん夏梨ちゃん。これで、元の生活を送れるよ。」

「では、続きましてジャジャーン！」

二人に手渡されたのはソウルキャンデー義魂丸。

「何ですか…これ？アメですか？浦原さん。」

「ふふふ。まあ、その丸薬を噛まずに飲み込んで下さい。」

二人は、恐る恐る丸薬を飲み込んだ、と同時に肉体から魂が抜けた。

「「！！」」

「ウソ！！」

「わー凄じ凄じ。」

「それは、ソウルキャンデーと言って肉体から魂を強制的に抜く丸薬です。勿論抜けた肉体もバッチリアフターケア。」

抜けた肉体は、そのまま遊子と夏梨に向き

「初めまして、私はチャツピだピョン。」

「初めまして、私はユキだチュン。」

二人は、目を丸くする。

「遊子さんと夏梨さんの肉体には、仮の魂が入っています。ですので、他の方々にバレる心配は絶対にありません。」

「ヨロシクお願いします(ダピョン、チュン)。」

「最後だけ余計だよ。」

夏梨が、ボソツと言った。

混乱（前書き）

携帯の画面がブラックアウトして電源が勝手に！！

そろそろ買い得かな？

スマートフォン良いな（涙）

混乱

現世、遙か上空に黒いフードを纏った男が居た。

前に公園に現れた人物と同一人物で、唯一石田が周辺に誰か要るのではないかと築いた人物だ。

「さて、お手並み拝見と言った所か…上からの命令とはいえ…気が進まないな。……だけど……」

男は、手に持っている特殊な対虚用を開発された撒き餌だ。

それを男は砕いた。

「黒崎一護。済まない。君の妹達の実力、確かめさせてもらっよ。出来れば…、彼方に引き渡したくないし、君も望んではないだろう。今、君は、戦う事すら出来ないし、尸魂界から出れない。」

男は、申し訳なさそうに、心の中で詫びる。

黒控ガルンダから出てくる虚を眺めた。

そして、出てきた虚の中から数体選び抜き、左手を翳す。すると男の前に虚が数十体やって来て膝をついた。

「此処は任せます。現世の黒崎遊子と黒崎夏梨に狙いを定めなさい。絶対に殺してはならない。残りは、足止めだ。」

と、言つて姿を消し、自分も姿を消した。

地獄蝶が一斉に瀟霊廷に響き渡つた。

「緊急事態、緊急事態、現世空座町に、大量の虚が出現。繰り返す、現世空座町に、大量の虚が出現。」

浮竹とルキアは、その一報を聞いたとたん!!

「馬鹿な！現世に大量の虚だと…あり得ない。」

「浮竹隊長!!」

「朽木！出撃出来るか？」

「はい。」

ルキアは、書いていた書類をそのままにし、浮竹隊長に、

「その任務、私と恋次が空座町に出向く事は出来ませんか？浮竹隊長!!」

そんな中で、花太郎とコンそして、一護は部屋の中に居た。

「おいおい！現世は、大丈夫かよ。空座町につて、大量の虚が出現したんだろ。」

「大丈夫です、皆さんとてもお強いですから空座町に行つて直ぐに倒してくれます。」

「何で、現世に大量の虚が出現したんだ？普通あり得ねえだろ……。」

一護は、居ても立っても居られず手を握りしめる。

「おい！一護！変な気起こすんじゃないやねえよな。今のためえじゃ無理だ。逆におめーが殺られちまう！」

「けど……。」

「黒崎さん。…此処は、結界が張つてあります。それに、あなたは、此所から出れません。僕は、…卯ノ花隊長にあなたを看護する用に総隊長からも言われています。ですから……！！！」

ドドーン……！！

そして、突然部屋の壁が吹き飛んだ。

「え！何で此処に虚が……！」

そして、虚は一護目掛け一直線に飛んだ…。

「み、満たせ！瓢丸！」

花太郎は、咄嗟に斬魄刀を抜いたが、虚を斬れる訳もなく呆気なく吹っ飛んだ！

「花太郎！！！」

一護は、動けない体を必死に動かし点滴の針を無理矢理抜いて花太郎の元に駆け寄った。

「っ！！」

「な！何やってやがる。一護！！！」

左腕に点滴を差してあったのを無理矢理抜いたのだ、抜いた所から血が止めどなく流れ落ちて、自分が来ている白い布に染みができ真っ赤に染まる。

後を振り替えれば、先程の虚は消えており、その代わり黒いフードを深く被った奴がそこに立っていた。

「見つけた。黒崎一護」

「恋次！今すぐ黒崎一護の元へ急げ！」

「！！隊長？も、もしかして…一護の事覚えて…」

「二度は言わない。直ぐ様黒崎一護の元へ行け！そして…護れ。」

「はい！了解です！！隊長！！」

恋次は、直ぐ様四番隊救護詰所まで舜歩で向かった。

ルキアは、浮竹と共に虚を倒しながら隊員達に的確な指示を送る。

「はあ！……何故静霊廷に…虚は、現世に出現したのではないのか？」

ルキアが虚を倒した所で後から浮竹が声を掛けた。

「朽木！！こちらは略片付く。一護君の元へ行っただけなさい。」

「え？今、何と？」

浮竹は、笑みを浮かべながら、

「朽木は、直ぐに一護君の元に行きなさい。」

「隊長は、一護の事を忘れて居る訳ではないのですね？」

「いや…辛うじて覚えている程度だ。それも、時間がたつに連れて

忘れてしまつたろう。」

浮竹は懐から在るものを渡した。

「朽木。此れは、一護君の腕に嵌めなさい。此が無いと一護君に近づく事は愚か触れたと同時に今まで一護君と共に戦つて過ごして来た事が全て忘れてしまつたろう。」

「！！何故そのような事を…」

「護廷十三隊が、一護君を護ろうと必死になる。四十六室は、一護君をどんな事しても殺しさせようとする。既に…一護君の処刑は3日後になつていた。」

「そんな！我々は、何も知らされて…」

浮竹は済まなそうに答る。

「我々も一護君には、生きてほしいし今の我々ではどうにもならない。だから朽木……この混乱を利用して一護君を…彼は今歩く事すら敵わないし霊力も使えない。そこで一護君を、逃がさなくてはならない、必ず触れるか側に居なければならぬ。言つてる事は大体わかつてもらえたかな。」

「はい。」

「君が居ない間に四楓院君と一護君の父親が来て居たのは知つて居るね。その時、二人から預かつたものだよ。残念ながら2つしか用意出来なかつたみたいけど。浦原君は、この事を事前に予期していた見たいだね。だから、今すぐ一護君の所へ行つて護つてあげてくれ！それと、もう一つ言い忘れていた。一護君の腕輪を嵌める時

は、自分が先に片一方嵌めてから使用してくれ。出ないと自分が護君の事を忘れてしまつからね。」
ルキアは、頷いた。

「護君を無事連れ出してくれ！頼むぞ朽木副隊長！」

「はい！！」

元気良く返事をする。ルキアは、一護の元へ急いで舜歩する。

斬魄刀（前書き）

最近、忙しくて打ってない…。読んで下さっている方申し訳ありません。

では、続きです。

斬魄刀

遊子と夏梨は、死神になって一週間ぐらい学校に登校していた。

自分達は、つい先日まで肉体から離れ、魂魄の状態で親父と戦いながらやつとの思いで死神に慣れたと言うのに、周りの友達達は、そんな事はお構い無しに普段と同じ用に接してくる。

「ねえ。夏梨ちゃん。あんな事が合ったなんて信じられないね。」

「うん。そうだね。だけど…現実には…私達死神になったんだからね。」

もう、授業中眠くなる事はないし、自分達が虚に襲われた時には、死神にも慣れる用にオッサンが手配してくれた。

けどまだ、己の中の斬魄刀の名はわからないけど…早く一兄を助けに行きたい！それは、遊子も同じ事。

夏梨は、ジン太とウルルと一緒に化け物を倒した経験が在るけど遊子の場合はそれが無い…。

「…考えてもしょうがないか…。」

「？」

「遊子！お昼休みだよ。今度は、三人で外で食べようよ。」

「うん。分かった！翠子ちゃん呼んで来るね！」

遊子は、ニコニコしながら翠子を連れて三人で屋上に上がった。そして、手に持って居るお弁当箱を広げた。

「テッサイさんが腕に寄を掛けて作ってくれたお弁当だよ。内らだけど余っちゃうから翠子ちゃんも一緒に食べてね。」

「わー凄いキレイ!!!」

豪華なそして、色取り取りバランスの取れた食べ物と並んでる。

「テッサイさん、毎度毎度こんなに作らなくても良いのに……。」

「でも凄いじゃん!! 毎回バラエティーに富んだお弁当を作ってくれるなんて! おまけに飽きない!!」

テッサイは、遊子と夏梨が学校に行く際、待つてましたーと言わんばかりにテッサイが作ったお弁当を渡す。お陰で家の家計が助かったのは言うまでもない。

「」「其じゃ、頂きます。」「」

「そう言えば……? 最近授業中とか一度も寝なかったよね!。もう大丈夫なの?」

「う、うん…。」

「まあ、色々あったからね。」

「ふうーん。そっか。何か二人共雰囲気全然違ってから何か合ったんじゃないかなーと思ってね。」

「……そっか。分かるんだ。」

「どんな感じに違うの？」夏梨が、疑問の言葉を口にする。

「チヨット何だか焦ってるような。そんな感じがする。」

「「!」」

「そ、そっかな…。」

「一応言って置くけど、アンタ達と何年一緒に居ると思ってるのよ
!」

「…そ…そうだね…。」

「「馳走さん。美味しかったよー。」

「うん。「馳走さま。」

と、言いながら遊子は、お弁当箱をかたづけ始めた。

「其じゃ戻ろうか。」

そして…、事は起こった。空から虚が数体現れたのだ。

「「!」」

二人は、空を見上げ緊張感が走る。

「夏梨ちゃん!…!ど、どっしょよ。」

「翠子!アンタは、何も言わず教室に戻って!」

「な?何言ってるの?」

「良いからサッサと戻るの!分かった!」

夏梨は、どすの利いた声で翠子を黙らせる。

「チヨ!わ、わかっよ。後でちゃんと話してね。絶対だよ。」

翠子は、そう言って教室に戻って行った。

「夏梨ちゃん!私達で退治できるかな?」

「できる。絶対できる。だって私達死神に成ったんだよ!」

「……うん。」

遊子と夏梨は、ソウルキャンディーを取りだし丸薬を飲み込んだ。

「「及びで御座いましょうか？遊子（夏梨）ピヨン（チュン）」

「私達の体、暫く見ててお願い。」

チャッピーとユキは、辺りを見渡し虚を発見、声を揃えて遊子と夏梨に言う。

「「いけません！貴方は、斬魄刀の名をまだ知らないし戦い方も危ういのです。私達は、あなた方の父、一心様より絶対戦わせるなど仰せつかっています。ですから、絶対いけません。」

「だって、そ、そんな事言ったって虚は、此処に…」

「か、夏梨ちゃん！来ちゃうよ！！」

「「戦わず、逃げ切って下さい。応援が来るまで時間稼ぎして下さい。…」」

虚は、辺りを見渡しながらターゲットを見つけたのか遊子と夏梨に狙いを定めた。

「来た！！」

「でも、ここ学校だよ夏梨ちゃん！！」

「なら、こつち！！」

遊子の腕を捕まえて、一気に屋上から飛び降りる。」

「えー！か、夏梨ちゃん！！！！ヒヤ！！！！」

飛び降りた後ろから虚達が追い掛けて来る。その数五体。明らかに虚は、自分達を狙っている事がわかった。

そして、着いたのがサッカーの練習試合でも使われるグラウンド。

「此所なら…大丈夫。」

虚は後ろから遊子目掛け襲ってきた、が、遊子は、刀が小刻みに震える。

それもそうだ。遊子は、虚を見たのは初めてではないが、刀を構えて化け物に立ち向かう事など一度たりともない。

「!!!」

「バカ!遊子!」

慌てて遊子を引っ張って攻撃をギリギリ回避させる。自分の方も虚が襲って来た…が、虚を蹴つ飛ばして何とか避けるのでイッパイイッパイで、オマケに虚は五体もいるねはキツイ。

と、上から降ってきた人物。

「なーにやってんだ!!!お前達ー!!!此処は素人の出る幕じゃない!!!おはよう!土鯨!!!」

地面に、刀を刺し解号する。すると地面の岩が怒ったように向きだしになり周りの虚ろが吹き飛んだ。

そう、二人のピンチに駆けつけ、空から降ってきたのは、エリート

死神さん？アフロさん？嫌々、イモ山さん…だ…た…つ…け…？…ん…前…にもこんな事が…？まあ…取り敢えず登場で…！！

「！何度も言わせるなー！私は、車谷源之助だー！！エリートだ！エリート！」

「誰に言ってるの（んですか？）」「」

「良いから！お前達は、下がってる！死にたいのかー！」

そんな事言ってる合間に虚が襲って来る。気が付けば虚は、いつの間にか増えていた。

「えーい！これでも私は死神！嘗めるなー！行くぞ土鯨！」

イモ山さんは虚を何とか倒していくが、イモ山は二人を護ながら倒す力は余りない。虚は、遊子と夏梨に数えきれない虚が周りを囲む。

「（まずい！こんなに虚が来る何て思ってもいなかった！さっきまで自分達で退治できると高をくくっていたのに…これじゃ…）」

遊子は、先程の死神が叫んだ様に自分も…自身の斬魄刀の名前を…
…足手まといに成りたくない…だから…だから…早く…。

「バカ！遊子何ポーとしてるんだよ…！」

「え…！」

「ぐう…！！！」

夏梨は、遊子を庇う為に自分を盾にし右腕を虚の爪で引き裂かれた。

「夏梨ちゃん！！御免なさい。夏梨ちゃん！！」

「良いから、前を見て構えて！！（此れじゃ、殺られる、逃げ切れない！！）」

「よ…も…夏梨ちゃんを…！！…私は、私は……足手まとい……何かになりたくない！！」

涙を浮かべながら…途切れ途切れ話す。だが、突然遊子の霊圧が上がった。周りの空気が変わり心の中から声が聞こえる。

『遊子！あなたは足手まといに何かならない。あなたの心は強い意思を持っている。さあ、私を呼んで遊子！今のあなたなら私の名を呼べる。』

「月夜を舞え！月夕ゲッセキ！！」

襲ってきた目の前の虚は遊子の刀から夕立の用な太陽を思わせる熱の光が虚目掛け飛んで行った。後ろに控えていた虚も巻き添えをくらい消えた。残ったのは地面を抉る用に一直線に広がった跡だった。

だが、安心しているのも束の間次の虚が襲ってきた。

「夏梨ちゃん！！」

「え！」

夏梨は、遊子の刀が変わった事で思考停止してしまった為、自分の

今置かれた状況を忘れてしまっていた。

遊子は、斬魄刀の名を呼ぶ事に成功したが、戦う事は全くの素人同然。咄嗟に、夏梨を庇うように手が出る。

「きゃ…うう…！」

遊子もまた夏梨を庇い左腕を爪で引き裂いた。

「遊子…！」

遊子の腕は、夏梨の右腕の傷より深く血が止めどなく流落ちる。

「（どうしよ！でも、どうして！どうして！遊子が先に…！何で、どうやって斬魄刀を解放出来たの！？頭の中で、その事だけが頭のを巡る。」

…私だって…私だって…！遊子が出来たんだ。絶対出来る！遊子の足手まとい何かに絶対…絶対ならぬんだから…！！）」

夏梨もまた周りの空気が替わり、夏梨の霊圧が上がった。

『ならば今がその時！私の名を呼べ夏梨！今の夏梨なら、私の名を呼ぶ事が出来る。信じる！私の力はお前の力！叫べ！』

月夜を彩なせ！^{ヘキツキ}霹月

刀からパチパチと電気が走る感覚がする。夏梨もまた刀を虚目掛け刀を振り下ろす。

すると虚は消え後ろにいた虚も消し飛んだ。残ったのは、地面を抉

るよつに残された広がった穴であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6895x/>

光と闇

2011年12月3日23時52分発行